

### 幕末 ロシアの対馬計画

宮永, 孝 / MIYANAGA, Takashi

---

(出版者 / Publisher)

法政大学社会学部学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

社会志林 / Hosei journal of sociology and social sciences

(巻 / Volume)

71

(号 / Number)

3

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

70

(発行年 / Year)

2024-12

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00031199>

## 幕末 ロシアの対馬計画

宮 永 孝

はじめに

- 一 幕吏による対馬報告
  - 二 対馬占拠事件の発端
  - 三 ロシアの闖入者Xが受けた秘密指令
  - 四 幕吏、幕使とロシア人との談判
  - 五 箱館領事ゴシケーヴィチのとぼけ
  - 六 イギリスの介入
  - 七 ロシア海軍首脳のある計画
  - 八 対馬をテーマとした詩歌やエッセイ
  - 九 井伏鱒二と対馬事件  
むすび
- 英文レジюме (Abstract in English)

はじめに

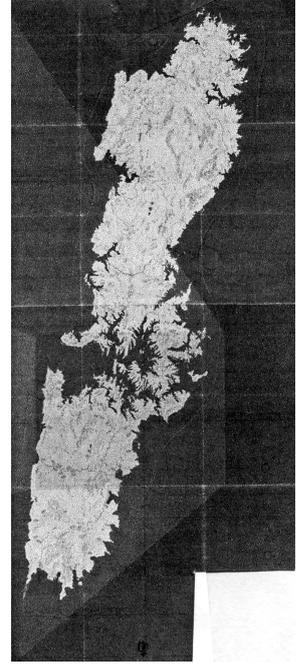
対馬は、別称、対州、ともいった。この孤島がいちやく有名になったのは、日露戦争のとき、同島沖で日本とロシアの艦隊が激突してからであろう。この島は、朝鮮半島と九州本土の中間に位置し、狭長（細ながく）、サツマイモのようなかたちをしている。谷が山地をきざみ、海岸線はでこぼこしている。山腹はけわしく、農地はすくなく、漁業に従事する者が多いという。

対馬は、古来、わが国と大陸、ことに朝鮮との往来の要地であった。鎌倉期、武藤氏が守護としておさめ、のち宗氏が支配するところとなり、室町・江戸時代をへて明治維新をむかえ、明治五年長崎県に編入された。

面積は六九七・七平方キロ



上空からみた対馬の風景



天保9年(1838)に作成した  
対馬図(国立公文書館蔵)

人口は約五万五千

という(『コンサイス地名辞典 日本編』三省堂編修所、昭和50・1)。

同島の地勢(土地のありさま)をもうすこし、くわしく語ってみよう。

幾多の山が国中に起伏し、山林が大部分を占めている。それらはけわしく、平原はすくなく、大きな河川もない。海岸線は折れまがり、弓形になった湾は小さいが、船の碇泊にとって便利なところである。海岸にち

かい村落は、おおむね肥沃であるが、その他はやせ地である。地質の多くは、小石や粘土をふくみ、山野の多くは水成岩に属するという。農業は本島におけるもっとも主要なものであるが、島村はむかしから半農半漁にしたがい、林業にも従事している(『津島通覧』長崎県対馬実業大会、大正2・11を参照)。

「対馬」の文字は、古くは「魏志倭人伝」(中国の正史「三国志」の「魏志(魏書)」にある「東夷伝——倭」)のくだりの通称。三世紀前半の日本の地理、風俗、社会などについて記した最古のもの)にみられる。いわく

郡(帯方郡)より倭(日本)に至るには、海岸に循って水行し、韓国(南鮮の三韓——いまの京畿・忠清・全羅方面)を歴て、乍は南し乍は東し、其の北岸狗邪韓国(弁辰(韓)十二国のひとつ)に到る七千余里。始めて一海を度る千余里、対馬国に至る。

其の大官を卑狗(彦?不詳)と曰い、副を卑奴母離(夷守)と曰う。居る所絶島。方四百余里可り。土地は山険しく、森林多く、道路は禽鹿の徑の如し。千余戸有り。良田無く、海物を食して自活し、船に乗りて南北に市羅す(穀物を買入れる)。

注・原文は漢文。 和田清 編訳  
石原道博

『魏志倭人伝・後漢書倭伝』岩波書店、昭和26・11より。

また「古事記」（八世紀初めに成立した三巻の説話的史書）に、

次に津島（対島のこと）を生みき。亦の名は天之狭手依比賣と謂ふ。

注・倉野憲司校注『古事記』岩波書店、平成31・10より。「津島」は古綴。

とあるし、「万葉集」（八世紀後半に成立した歌集）に、対馬のことが、

毛母布禰乃波郡流对馬能 安佐治山 志具礼能安米尔 毛美多尔家里

とある。すなわち――

3697 百船の泊つる对馬の浅茅山 しぐれの雨にも みたひにけり

\* 秋のすえから初冬にふる小雨。

この歌は、対馬の浅茅の浦（ちがや）「いね科の多年生植物」が生えている入江の意）に着いて順風をまつこと五日。しぐれの雨に一面に色づいた浅茅をよんだもの。

注・新 日本古典文学大系 3 『万葉集 三』岩波書店、平成14・7より。

時代はさらにくだり、「和漢三才図会」（寺島良安が漢文で著わした図入りの事典。正徳二年「二七二」の成立）に、対馬のことがすこし出てくる。

ロシア人の番  
小屋があった  
牛島



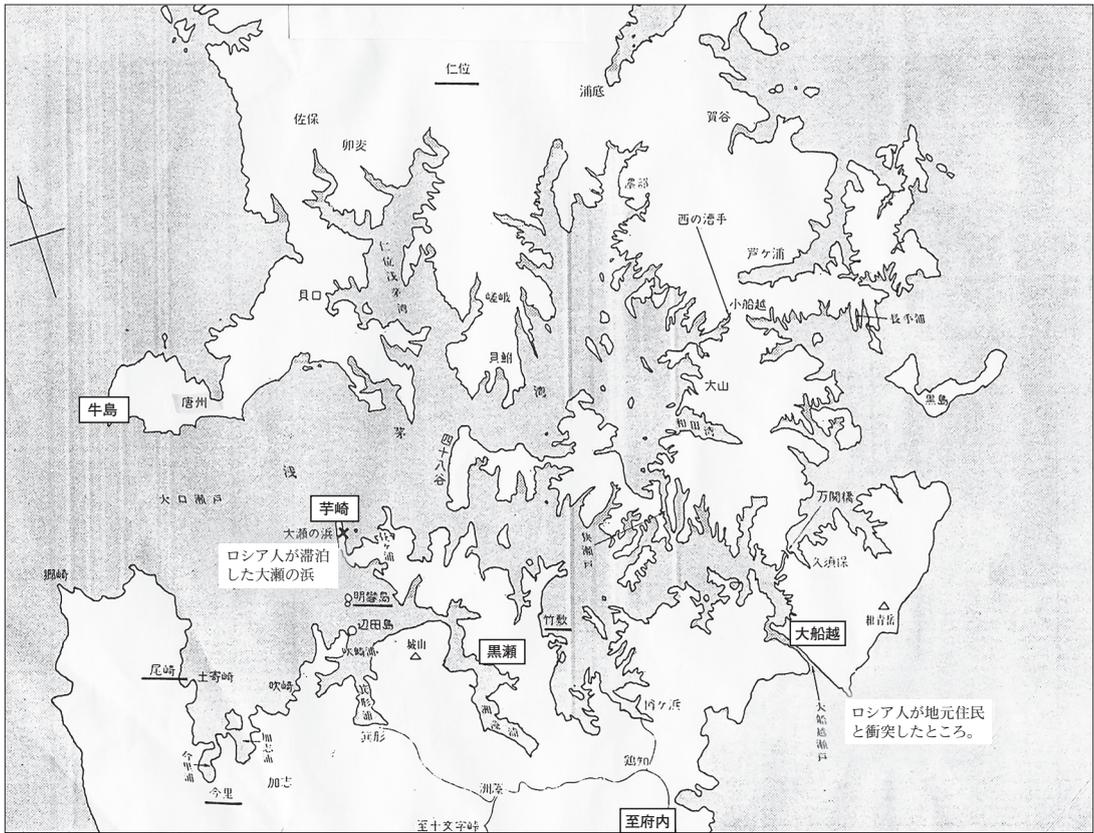
芋崎の岬

ロシア人が滞泊  
した大瀬の浜

出典：日野清三郎著  
『幕末における対馬と  
英露』東京大学出版  
会，昭和43・12。

### あ そう 浅茅湾図

(対馬島中央部)



ロシア人が地元住民  
と衝突したところ。

対馬

一宮 和多郡美大菩薩  
二郡 高二万五千石

上県 かえつあがた 下県 しもつあがた 「この国は南北長さ凡そ三十五里、東西凡そ六、七里」(以上長崎県 『国花記』による)。

対馬と朝鮮と相対す。対馬島より釜山まで約五百里「日本道五十里」。順風であれば一日で着ける。

注・島田勇雄 竹島淳夫 樋口元巳 訳注 『和漢三方図絵 14』平凡社、昭和64・11より。

### 一 幕吏による対馬報告

幕末期、対馬は欧州列強、ことにロシアやイギリスがその勢力を極東にのばすさいに、かれらの注目するところとなった。イギリスは万延元年(一八六〇)に早ばやと同島のまわりを測量したし、ロシアは清国から沿海(日本海に面する地方)とアムール地区を得たのち、同国海軍の首脳とその部下は、対馬の一角を手に入れようと図った。いわゆる

#### 対馬占拠事件(万延二年「一八六二」二月三日に勃発)

が、それである。のちに対馬に派遣された幕吏による同島の風土(土地のようす)を調査した報告書(「対馬表の儀に付き申し上げ候書付」)があるが、その要約を意識したものを左記にかかげてみよう。

対馬国は、東西五里(二〇キロ)から三、四里(二六キロ)、南北三十五里(約一四〇キロ)ほどという。湾口のまわりの多くは、海が浅く、入江に村が二十三ある。水の深い入江を通じて大船越村に至ると、堀割(寛文12年「一六七二」につくった水路)と番所がある。この地で通る船を改める。

府中町（城下町。いまの下県郡巖原町）は、対馬国の東南のはしにあり、ここから肥前・平戸へは六十六里、筑前（福岡博多）へ八十里である。城下町の府中の港はかなりのもので、大きな船が入る。町なみも相当なものである。とくに富豪はいないが、藩主御用達の商人が二人いる。

亀屋吉右衛門……………鯨組問屋。大船を五、六隻。小舟を三十隻ほどもっている。

三木惣右衛門……………呉服商。

極貧者はいないらしい。

神社は十四カ所、寺院、以酌庵（対島の禅寺の意）が三十七ヶ所ある。府中の町家（ちようか）の数は、約二五〇〇軒。人口は九〇〇〇人ほど。村の家屋は三六〇〇軒ほど。人口は二万人。家屋の数は、あわせて六一〇〇軒。総人口は二万九〇〇〇人ほどである。

上県郡（対馬を二分したとき、上方の地区をいう）のほうは平地が多く、田畑も多い。おしなべて土地はやせているが、樹木は自然に繁茂している。牧場もあり、毎年五月ごろ二十四、五頭生まれる。山々はいずれも雑木がはえている。場所により楠・桜・松・かし・杉・くりなどが茂っている。ひのき、杉の林もある。国中にはげ山は一つもない。

住民は懦弱であり、農業にひじょうにうとい。絶海の孤島に住んでいるせいか、余計なしごとをしない。農閑期に漁業をやる。山上の耕地から海上にむらがる魚をみつけると、大声をあげて仲間知らせる。すると百姓はクワやカマをすてて船をこぎ出すが、魚はちりぢりになったあとである。

住民は生れつき、偏くつなうえ不精である。漁業はもちろん山間の耕作にも精をださず、食物をたくさん得たら、それでもってしばらく口腹をみたすところから、しぜん惰気が生じるものであろう。そのため諸事おこたるようになり、田畑の手入れもじゅうぶん行なわず、他国の農業のようすを見聞しようとする気もない。農具などもむかしから使いたものを、他国の製品などは見当らない。

不便な品を使い、耕作のときも実用に適さない方法を用い、手間をおしんでいる。たとえば、イモを植つけるときやそれを取り入れるとき、牛を用いている。その他の耕作のときも同様である。だから牛馬が多い（国内の牛の数は、三一〇〇〇匹あまり、馬は三〇〇〇匹ほどいる）。

薩摩からさつまいもを取りよせ栽培させようとしたが、がんこな州風があり、新規なものを好まないため、なかなか普及しなかった。が、じょじょに説きふせ、元文のころ（十八世紀中ごろ）になると、第一の食品となり、しだいに植えつけ、八郷において一万八〇〇〇俵取り入れるまでになった。文政のころ（十九世紀の初とう）は、十一万俵、いまは十六万七〇〇〇俵の収穫があるという。百姓は各戸五〇俵取り入れると、冬から春の収穫期までそれをたべ、ほかにそば・アワ・もちろし・小豆・大豆・木の実・草の根・海草などを食料とし、ほそぼそと暮らしている。が、飢きにさいしても人命

にかかわるようなことはなかった。天保六、七年（一八三五、三六）は、凶年（不作のとし）であったが、山や海の雑品をくらい、餓死をまぬがれた。対馬の気候はよく、水路もひらけ、山岳も多い。獣類は、鹿のほかいない。その数はわずかなので、田畑を荒すほどでない。

府中のほか、船を建造するところなく、沖にでて漁をすることができぬため、どの村もむかしからのきまりを守っている。そのため朝鮮へ渡ることもない。府中にちかい村では毎日得た魚を領主におさめる。ブリ漁のときは、防州（山口県）・長州・芸州（広島県）・筑前（福岡県）・肥前・壱岐（長崎県北部）あたりから漁船がやってくる。

対島の産物は、クジラ・ブリ・するめ・ほしイワシ・しいたけ・きくらげ・五倍子（ヌルデの葉からでる染料）・ひじき・和布（はだざわりのよい布地）・ハチミツなどであり、多くは他国に売りにだす。ほかにツバキ油、陶器、半紙、茶などを製している。塩・ミソ・茶・筆・スミ・ローソク・織物などの日用品は、大坂より船便で仕入れられている。酒は対島産のものもあるが、堺から仕入れられている。在方（いなか）には酒造所は一軒もない。

島内に銅坑・銀坑の跡がある。朝鮮との貿易は、天明のころ（十八世紀後半）よりしだいにおとろえ、私貿易の形をとるようになり、牛皮・牛角を商うようになった。砲台は領主の屋敷の裏手——阿須浦に一カ所、ほかに遠見番所が各村にある。島にある鉄砲は約二千挺、西洋砲はないらしい。

国内の暮らしは、概して質素であり、領主のほかみな綿服を用いている。領主は対州（対島）に男女十四人の子どもがある。嫡子・善之允（のちの宗 義達）は、行状もよく、なかなかの人物らしい。家中はもちろん国内の評判もよいようである。

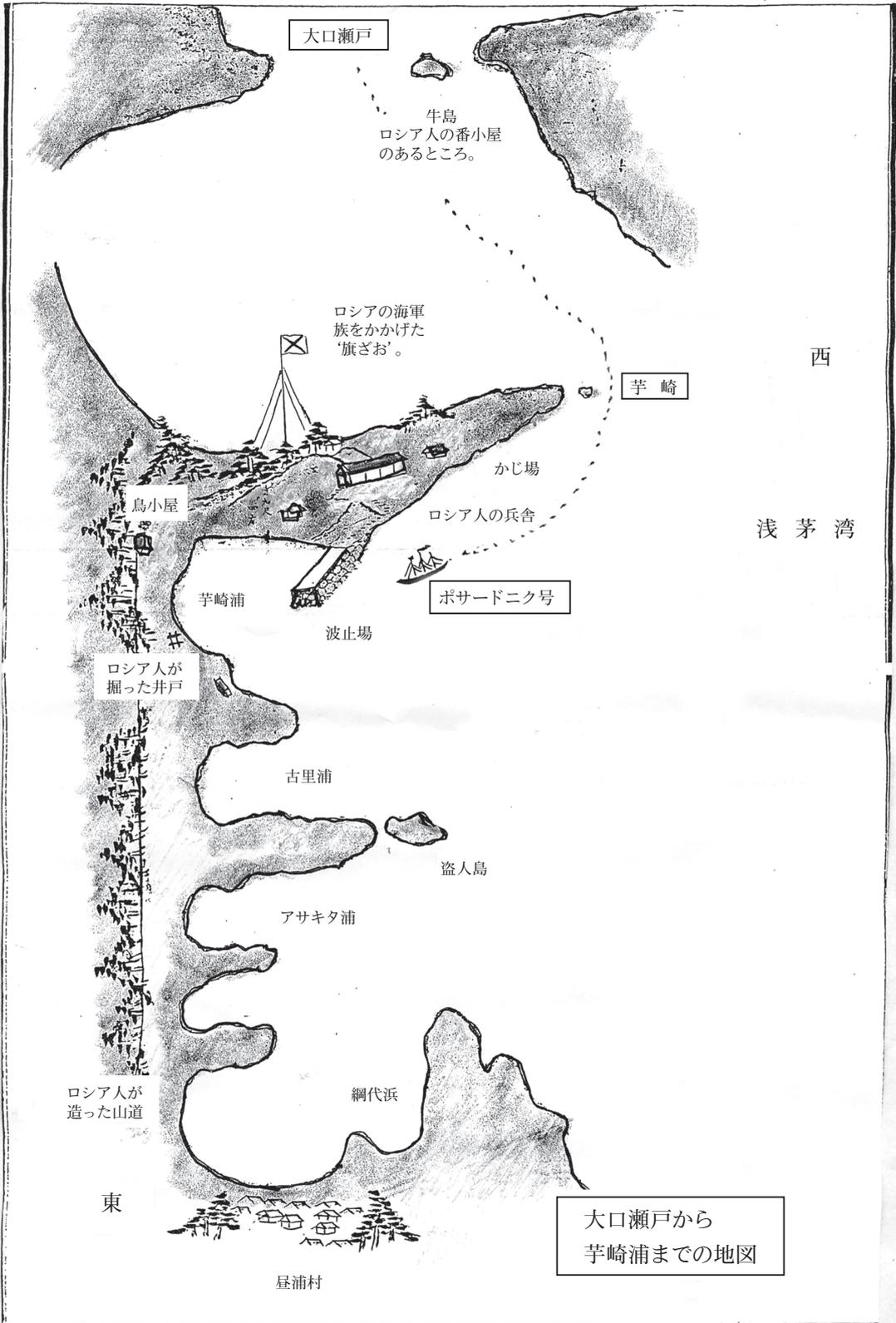
外国奉行 野々山丹後守（兼寛）

目付 小笠原撰津守（広業）

勘定吟味役 立田録助（正直）

らが、下吏をしたがえ、二組にわかれ江戸を出立したのは文久元年（一八六一）八月二、三日の両日（九・六、七）、長崎に着いたのは九月九、十日（一〇・一二、一三）であった。同月二十日（一〇・二三）幕艦咸臨丸で対馬におもむき、露艦退去後のようす、同艦碇泊ちゅうの動向などをくわしく調査した。のち、同島の八郷（上県郡、下県郡）を巡察し報告するよう命じられた。

村を巡回するため、一行は同年十月十日（一八六一・一一・一二）府中を出発し、同月十六日（一一・一八）いったん城下町に帰った。十月二十一日（一一・二三）ふたたび出発すると、十一月十日（一二・一一）府中にもどるまで十九日間検分をおこなった。が、その巡回旅行は安易な





ものでなく、三手にわかれて対馬を調査したが、風雨や難所（けわしい所）に行手をはばまれ、苦勞を強いられた。そのため思いのほか日数がかり、五十三日も要した。

## 二 対馬占拠事件の発端

万延二年二月三日（二月十九日改元、文久となる。陽曆一八六一・三・一三、ロシア曆三・一）の午後二時ごろのことである。対馬中部の浅茅浦（湾）に、三本マストの外国軍艦が入ってきた。その艦はやがて湾内の芋崎の岬を右かいすると、海岸から三〇〇メートルほど離れたところに碇泊した（午後四時ごろのことらしい）。異国船が一隻同浦に入ったことを藩庁が知ったのは、夜なかのことである。

藩庁では夜半にもかかわらず、重役らが会議をひらき、外国船の動静をひそかに探るために、翌朝さっそく騎馬の急使と斥候を芋崎浦（尾崎

浦ともいう)に差しむけることにした。また前々年イギリス艦が再度やってきたとき(安政6・4〜5まで滞泊、同年11再来)問情使(事情調査役)をつとめた大目付・戸田惣右衛門を派遣することにした。偵察隊は翌日(二・四)の昼すぎにもどった。門情使一行は、正午に現地にもつて城下を出立したが、途中で偵察隊と出会い、異国船とはロシア艦であることを知った。

戸田一行は、夜に入って芋崎(尾崎)村に到着した。この村の所管は、郡奉行・大浦作兵衛であり、かれは下吏をともないすでに村に来ていた。夕方、ロシア艦の乗組員が上陸し、郡奉行の宿所にやってきて、艦の修理をおこないたい、と申し出たようだが、ことばがよく通じなかった(日野清三郎著『幕末における対馬と英露』、東京大学出版会、昭和43・12、三二頁を参照)。

二月五日(三・一五、ロシア暦三・三)——第一回のロシア側との会見が、艦長の部屋でおこなわれた。藩吏は漢文をもって筆談しようとしたが、相手側の通訳(水夫兼日本語研修生・アレクサンドル・ユガノフ)は、日本語がすこし話せるようであった(伊藤一哉『ロシア人の見た幕末日本』、一九二頁)。口頭で聞きただすうちに、来航の艦のようすがだんだんにわかってきた。艦はロシアの蒸気艦(帆を併用する)という。

筆談役・唐坊莊之介の記録。

船名は「ボツサツニク」

船将は「ビリイネフ」

船の長さは二百十尺(約60メートル)

乗組員は三百六十人(注・これは大げさにいったものであろう)。

コルベット艦「ボサードニク」号のこと。

艦長は海軍大尉ビリリヨフ、ニコライ・アレクサンドロヴィチ(一八二九〜八一、のち海軍少将、クリミア戦争で活躍)

注・同艦はペテルスブルクの海軍工廠で建造され、一八五八年に就役し、一八六九年退役。高速軽装の小艦。全長53.6メートル 排水量903トン 備砲11門 乗組員178名。

ということがわかった。艦長ビリリヨフ(ビリレフとも表記する)は、ロシアの中国海域司令官リハチョフ、イヴァン・フォードヴィチ(一八二六〜一九〇七、のち海軍中将、クリミア戦争で活躍)大佐の極秘命令をうけての来島であった。



ポサードニク号の艦長  
ニコライ・ビリリヨフ

### 三 ロシアの闖入者Xが受けた秘密指令

ビリリヨフ艦長(32)は、長崎にいたゴスケヴィッチ領事とその家族を箱館に送りとどけたのち、極秘命令のほか、

朝鮮海域

と

対馬島の測量

をおこなう任務をあたえられていた。これらの地方は、ロシアの沿海州への途上にあたり、その正確な測量図が必要であった(リハチヨフ大佐書翰、海軍大将コンスタンチン大公宛「一八六一・四・二二(一〇)付」、大日本古文書「幕末外国関係文書之五十一」所収)。

ビリリヨフ艦長(一八五九年〜六三年までポサードニク号の艦長をつとめた)は、二年前に江戸から長崎にやってきたことがあった。今回は箱館から当地にやってくる途中で、艦に損傷をうけたという。ついでに当地において修理をくわえたい。またその間、一里(四キロ)四方の遊歩を許可してもらいたい、といい、酒肴しゅうこうをすすめた(筆談役・唐坊莊之介日記)。

酒を勧めながらビリリヨフは、対馬の絵地図や世界地図を問情使の戸田らにみせた。このとき藩の役人が地中海から紅海に出るスエズ運河(全長一六〇キロ)の掘削くわくのことをたずねると、いま掘っているところであるが、いづれ開通するであろうと答えた(一八六九年完成)。こんどは相手が、カラフトのことを知っているかと聞くので、手まねによって、カラフトやカムチャツカ、ロシアのほうを指しめすと、艦長は大いによこんだ。またアメリカやイギリスのほうを指しめして質問すると、これらの国と通交があるのかとたずねたので、ただ地図や書物によって知っているだけであると答えた。

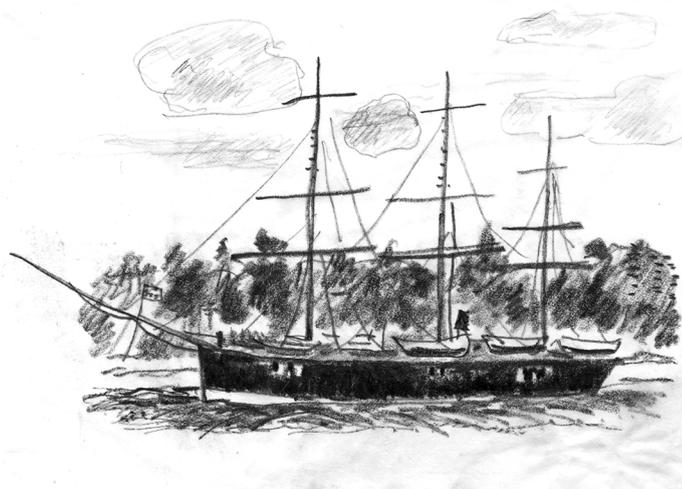
また対馬の浅海図あさうず(イギリス人がつくった海岸の測量図のことか)が、この島の

ことを一島に描いているのはよろしくない。二島（上県郡と下県郡）に描くべきである、と語った。艦長がいうには、イギリス人は人がわるいという。この島へもやって来ているが、油断してはならぬ。ロシアは日本人が好きである、といった話をした。そのようすから相手は、親睦をもとめているようであった（唐坊日記）。

さて破損箇所をみたいというと、艦長が先に立って艦を案内した。マストや蒸気釜（ポイラー）（漏水があるという）を見分したが、とくに破損のあとが認められなかった。しかし、ピリリヨフは対馬に到着する前夜——西北西の風がふいたのち、前檣（ぜんじょう）（艦のまえの部分にあたる帆柱）に損傷があることを確認したという（リハチョフ大佐宛ピリリヨフ書簡「二・三〇付」——「幕末外国関係文書之五十」所収）。

翌日（二・四、三・一四、ロシア暦三・二）ピリリヨフ艦長は、戸田惣右衛門に開港地に準じ、つぎのような要求をだした。その大要はつぎのようなものである。

- 一 コルヴェット艦（ポサードニク号）を修理する全期間ちゅう、ヨーロッパ人に対して開かれた港（開港場）における協定に準じて、すべてを行使すること。
- 二 当方の要求をみたすため、藩の役人一名を艦長付にすること。
- 三 作業小屋、兵舎、病院を建設するための用地、あるいは病院にあてるための寺院を、海岸に提供すること。
- 四 生鮮食品や必要とするものが購入できること。
- 五 木材およびその他の資材、労働者を提供すること。
- 六 入江（芋崎浦）の両側（岸）、島の内陸一里（四キロ）を立ち入り禁止にすること。
- 七 測量調査を妨害しないこと。
- 八 ポートの賃借、購入ができること。
- 九 藩当局との相互訪問と表敬。
- 十 艦長が藩主を訪問し、その返礼をうけること。
- 十一 当方がのぞむ相手に贈物をするができること。
- 十二 長崎との郵便連絡がとれるようにすること。



ロシア海軍の  
コルヴェット艦 ポサードニク号 (903トン, 備砲11門)

侍従武官 ビリレフ

注・ロシア暦一八六一・三・二付

(西暦三・一四、和暦文久元・二・四)

「幕末外国関係  
文書之五十」所収、平成17・3。

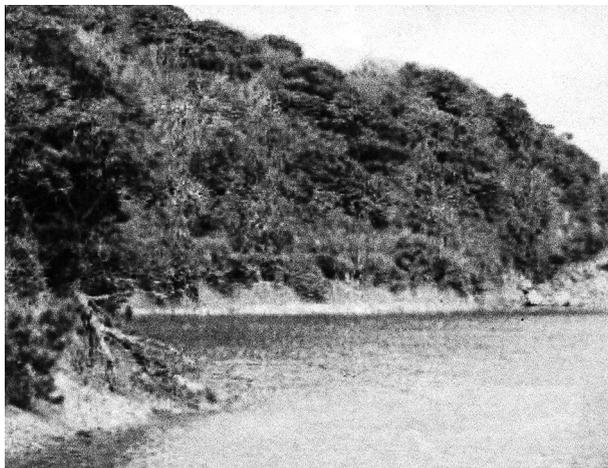
なお、ビリリヨフ艦長は、ほどなくかん口令をしいた。対馬におけるロシア人の潜在に関して、また同島について知りうることの一切について、口外せず、手紙にも書かないことを、部下の準士官・士官らに誓約させ、署名させた(一八六一・三・二一、文久元・二・二三)。

俗に「対馬事件」といわれる、ロシア艦による対馬滞泊については、明治中期からこんにちに至るまでいろいろ書かれ、最近ではロシア側の新史料による成果が内外の研究によって逐次発表され、この事件の核心が明らかになりつつある。

艦隊の修理を口実に、対馬の一角を占拠し、無期限に碇泊したり、施設を建設することとは、「日露和親条約」(ロシアの全権プチャーチンと大目付・筒井肥前守、勘定奉行・川路聖謨<sup>としあきら</sup>らが、安政元年「一八五四」十二月に調印)の条項にないものであり、国家の威光を愚弄するその行為に、対馬藩と幕府は苦境に立たされた。

ロシアの狼視虎歩<sup>みょうしこほ</sup>——その領土的野心については、当時の日本人の一部にもつとに知られていた。ロシアの対馬來航と占拠(居すわり)は、ロシアの国策(国家的目的)の一環であったのか。それともロシア海軍の上層部の一部の者だけが、秘かに画策したものであったのか。要するにロシア側の本当のねらいは何であったのか。その真意(おもわく)をさぐろうとするのが筆者のこの研究の目的でもある。

その後もロシア側と対馬藩吏との折衝(談判)はつづいた。



ポサードニク号の碇泊地。ロシア人は芋崎の浜辺に長さ約90メートル、幅約4メートルの兵舎を建てた。ロシア人の退去後、対馬藩が破きゃくし、現存しない。



芋崎

尾崎村に出張した問情使は、ピリリョフとの会見のようす、先方の要求等について藩の重役に報告するとともに、その指示をもとめた。その回訓はつぎのようなものであった。

—— 船の修理を理由に外国船が来航し、そのつど滞泊をゆるしてきたが、どんなわざわいが起るか計りしれない。難船の修理は開港場にかぎらず、お国においてもこれをさし許すよう命が出ているので、ロシア艦の修理を許可することにした。

三日後の二月七日（三・一七、三・五）、問情使はポサードニク号を訪れると、右の趣旨をつたえた。このとき戸田は、対馬を退去し、長崎へ移動できないかというと、外国からの客にそのようなことをいうのは無礼だと答えた（ワレンチン・スミルノフ筆「イヴァン・フォードロヴィチ・リハチョフの対馬計画」〔二八六〇〜一九〇四〕）。この間、ロシア人たちは艦から

大型のランチ（はしけ）

ボート（小舟）数隻

をおろすと、入江を測量し、海図を作成したりした。そのようすを目撃した藩の役人らは、不安な気持になった。

対馬藩は、二月六日付（三・一六、三・四）で、藩主・宗 対馬守の名で、幕府にたいして第一回目の報告をした。その中味は——去る二月三日申の刻ごろ（午後四時）、異国船が入江にやって来た。その船は尾崎浦の岸から三町（数百メートル）のところを碇泊すると、はしけを乗りまわし、海の深さを測ったりした。その後乗組員らは、上陸すると、船が破損しているので修理したい旨村役人に申し入れた。異国船はロシアの船であり、長さが三十間（約九〇メートル）、乗組員は三百六十人、船主はビリレフという。

船は箱館を出帆し、長崎・広東をめざしたが、船体を損傷したので、当浦（湾）に入った。材木および大工が入用である。難船の取りあつかいについては、かねて指示が出ているはずであるから、検分のうえ願いどおり取りあつかって欲しい、という。

一方、今里村（下県郡のむら）の警備を担当していた者が、戸田問情使の命に報さないので、その交替がおこなわれ、新たに尊王攘夷論者の大浦教之助（70）が問情使に任命された。同人とその同行者は、二月十日（三・二〇、三・八）、ポサードニク号を訪れた。ビリリヨフは酒肴をだして役人らをもてなした。大浦はこのとき、酒をのむためにここにやって来たのではない、といい、不用意にも扇子でもってテーブルを叩きはじめると、酒肴が散乱した。それをみてビリリヨフは、ロシア皇帝の艦において、このような無礼を許さぬ。みせしめにお前たちを罰してやる、と激昂したので、四人の役人はひざまずいて赦しをこうた（前掲、ワレンチン・スミルノフ論文）。注・大浦は和暦二月二十日病気を理由に問情使を辞した。

ここまでがロシア艦の対馬来航以来の緊張の四ヶ月間の日露のやりとりである。が、以下ポサードニク号が芋崎浦を退去するまでの約半年間のおもな出来事をしてきぎ一覧表にすると、つぎのようになる。

## 対馬藩の動向

2・12(和暦) || 3・22(陽暦) 問情筆談役・川本九左衛門は、中間報告のため、府内に帰った。ロシア側は、いっこうに艦を修理するようすがないので、早く修理するよううながすと、艦をてきとうな場所に引きあげ、よく調べる必要があると答えた。

2・14 || 3・24 対馬藩では防備体制を編成した。

2・16 || 3・26 筆談役・川本九左衛門は、大浦教之助に代わって他の役人をつけて露艦を訪れた。鍛冶場・木材・食料(トリ、タマゴ)の要求がでた。鍛冶場借用の件は、艦の修理がはじまったとき、貸しあたえると伝えた。

樹木は、山があってもみな、神山であるため、伐採できないと答えた。トリ、タマゴの提供はいっさい拒否した。

2・19 || 3・29 幕府に第二回目の報告が送られた。——三隻から五隻のはしけが、尾崎浦をのりまわし、測量をおこなっていること。大砲のうち、威をしめしていること。建物の建造、食料(牛、とり、タマゴ、野菜など)を要求しているが、食糧難を理由にこれを拒否していること。

2・20 || 3・30 朝鮮方頭役・朝岡讓之助は、新たに問情使となり、筆談役・川本九左衛門とともに露艦をおとずれた。ピリリヨフは、川本のたいどに不作法があるとし、同人をきらっていた。このとき、ピリリヨフより、藩主にたいして、大砲五〇門献上したい旨の提案があった。

それにたいして、大砲はたくさんあるから要らぬと思われる。

## ボサードニク号の動向

3・9(ロシア暦) これまで同艦は、はしけをくり出し、測量をつづけ、毎日正午になると、号砲をうった。

3・10 艦は牛島方面に大砲を一発うった。夜中にはしけで湾内をのりまわした。

この間、ロシア人は百姓に金や品物をあたえ、かれらを懐柔しようとしていた。

幕府の許可があれば受納されるかも知れぬ、その辺のことはわれわれにはわからぬ、と答えた。

2・28 〓 4・7

お昼ごろ、朝岡・川本の両人は露艦をおとすれ、艦の修理場所、建物の建設について、ピリリヨフと協議した。

——建物（ロシア人の住居——兵舎のこと）は、長さ約90メートル、幅約4メートルほどの規模のものであった（「対州芋崎停泊露船記録」）。

ピリリヨフは、艦の修理場所として、——  
貝鮒領かいふりょうゆり越こし  
昼ヶ浦ひるがうらの芋崎の小浜  
を要求した。が、神領を理由に拒否された。  
対馬藩が提示したのは、  
猪之浜いののはま 鉢之尻はちのしり 賀志浜かしま  
の三カ所であり、のちにロシア側が見分することになった。

文久元年二月二十九日（一八六一・四・八、ロシア暦三・二八）の午後四時ごろ、——リハチヨフ大佐が乗艦するクリッパー艦ナエズドニク号（艦長ゼロトヒン、乗組員一七〇）は、尾崎浦に入ってくると、ポサードニク号から二〇〇メートルほど離れたところに停泊した。

同艦はピリリヨフの安否をたずね、また食糧や牛をつんでいた（老中宛、宗 対馬守の報告「三・二付」）。翌日、リハチヨフとピリリヨフは小型艇にのると、入江を巡回し、補給をおえた午後、退去し、西南にむかった。

3・2 〓 4・11

藩庁は幕府への報告や防備への対策などで多忙をきわめていた。この日、ポサードニク号は、午後八時ごろ抜錨すると、浅茅湾あさぢに入り——その後——貝鮒村かいふらのまえを通り——さらに湾内わんないのところで遊弋ゆうよくしたのち——湾の奥にある西の漕手こいでに碇泊した。警衛の船が大型ランチに近づくと、水鉄砲のようなものを放ち、近よせなかった。（家老・仁位孫一郎の報告）

3・28

西の漕手の小船越こぶねこしで、小船にのった日本の役人らに大型ランチの消火ポンプの水をあびせた。

3・3 || 4・12

この日の朝、前日とおなじようにポサードニク号は、西の漕手あたりまでやってくると、七十余名のロシア人が上陸し、杉や松を十四本かってに伐採し、本船に積み入れた。村役人の注進によって、役人をむかわせたが、かれらは銃剣をもっており、容易に近づけなかった。

藩庁は大山村に滞在し、ちゅうの家老・仁位および勘定奉行・樋口らを露艦にさしむけ、抗議させた。はじめはなかなか艦長と会えなかった。が、ようやく姿をみせたので、樹木を無断で伐採したことをなじると、艦を修理する木材の提供を申し出ているが、三十日たっても何ひとつよこさないで、勝手に伐取したと答えた。

3・4 || 4・13

樹をつみこんだポサードニク号は、午前六時ごろ同所を出帆すると、昼ごろ、貝鮎村の玉崎というところではばらく停泊した。のち、芋崎の古里浦にやってきて碇泊した（対馬藩主の報告——魯人挙動の案内 三『開国起原』所収）。

3・6 || 4・15

郷士・百姓ら十四、五名が小船にのり、ポサードニク号のそばを通ったとき、はしけ三隻がやって来て、拉致され、翌朝、武器とともに返された。艦内ではもてなしをうけ、帰るとき三両二歩・和紙・パン・砂糖などを土産にもらった。

3・7 || 4・16

あらたに問情使に任命された平田茂左衛門と筆談役・満山俊蔵らは、黒瀬村におもむき、ピリリヨフに面会をもとめたが拒否された。代わって満山が本船にのりつけ面会をもとめたが、なかなか会えず、帰ろうとするとき、艦長がようやく通訳をつれて姿をみせた。

3・29

ピリリヨフは、海岸で日本人の大工をつかって建設工事に着手した。作業は十一時半ごろおわった。が、棒きれをもった大勢の百姓がやってきた。かれらは正午の号砲を聞いたとたん、一目散に逃げだした。

4・2

ヒラタ・モザエモンとミツヤマ・シオドイゾオ<sup>マ</sup>がやってきた。ピリリヨフの要求は、牛の提供をのぞき、すべてうけ入れられた。午後四時、ポサードニク号は芋崎に投錨した。

4・3

（芋崎の）海岸に、掲揚台<sup>けいようだい</sup>がたてられ、ロシア旗がかか

このときピリリヨフは、つぎのような申し入れをした。

一 大工十二名を雇用したい。賃金は支払う。そうすれば、三十日ほどで退帆する。

一 材木が不足しているので、伐ってわたしてほしい。

一 一日にトリを二羽ほしい。

一 土官用に魚がたくさんほしい。

一 水がにごりがちなので、清水がほしい。

げられた。ピリリヨフは、日本の人夫らの助けをかりて、左記のものをつくることを計画した。

——ロシア式のむしプロ・台所・納屋・波止場・野菜畑・レンガ製造所。

\*旗ざおは、深さ90cmの穴を四つ掘り、そこに大石をおき、その上に根元を焼いた柱（ふとさは24cm〜18cm）を立てたもの（奥書札方毎日記）。

家老の仁位孫一郎は、三月十日（4・19）以来、黒瀬村に滞在し諸般の指揮にあたっていたが、ある重大な話を耳にしたので、同十四日（4・23）突如府中におもむいた。かねてピリリヨフは対馬藩主への面会をもとめていた。が、十三日（4・22）用向きに関連して、平田と満山に左記のような極秘の情報をつたえた。いわく。

——イギリスは、かねてから対馬を借りうけたいといった意向を幕府へ伝えていたといったうわさがある。が、このことは実現しそうなもので、二年後、イギリスは軍艦を多数、対馬にさしむけ、当国を攻撃し、兵威をもって掠奪すると聞いている。ロシア皇帝は国書をもってこのことを藩主に内通し、対馬藩のお味方をしたい。ロシアが貴国の味方になれば、たとえイギリスが襲ってきても心配はない。

ピリリヨフは、このような主旨の話をしたのち、対馬の防備についていろいろ助言をした。

一 府内の浦の両方（浅茅湾と対馬海峡のことか）に、大砲を十二門配備する。

一 大口（浅茅湾の瀬戸）と浅海（浅い海にちかい陸地の意か）の海岸に大砲を二十四門、四十谷に二十四門、天道山に十二門配備する。四十谷に大砲を備えるときは、蒸気機械を用いる。

一 江戸や長崎へも大砲をもっていき、その打ち方を伝授すれば、イギリスやアメリカといえども手出しはできない。

なおピリリヨフは、江戸の台場はロシアの申しでによって造られたといい、また浅海や府内湾の精密な絵図が完成しているとも語った（「対州芋崎停泊魯西亜船記録・奥書札方毎日記」）。

ロシア人は三月七日（4・16、ロシア暦4・3）以来、いろいろ施設をつくりはじめた。

芋崎におけるロシア人のために、府内からは大工の吉之助が、ほかに各村からやって来た二十名ほどの大工が働いており、さらにかれらを監視し、ロシア人の用むきを聞くために表目付が派遣されていた（前掲日野本、八〇頁）。三月十六日（4・25）、ピリリヨフは上陸すると、大工らに何か指図していた。ロシアが最初につくったものは何であったのか。まず地面を掘って小屋をたてたものであろう。かれらが逐次、芋崎から昼ヶ浦の沿岸に建てたものは、つぎのようなものであった。

大工の作業場（大工小屋。芋崎に一ヶ所、長さ約10メートル、幅約6メートル）

かじ場（芋崎に一ヶ所、長さ約8メートル、幅約4メートル）

材木置場

番小屋（約1.5メートル四方の見張場——牛島の小島と芋崎に各一ヶ所<sup>うしじま</sup>）

旗ざお（ロシアの海軍旗をかかげる柱——牛島の小島に一ヶ所と芋崎の山に一ヶ所）

将校集会所（芋崎？）

兵舎（芋崎に一ヶ所、長さ約9メートル、幅約4メートル）

穀物倉

物置小屋

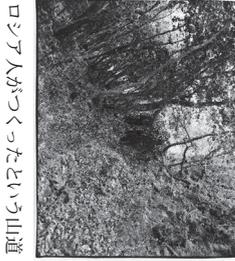
レンガ焼カマ（レンガ製造所）

病院（ロシアの国旗「海軍旗？」がはためいている急患用のもの——オリファントの「対島訪問」による）

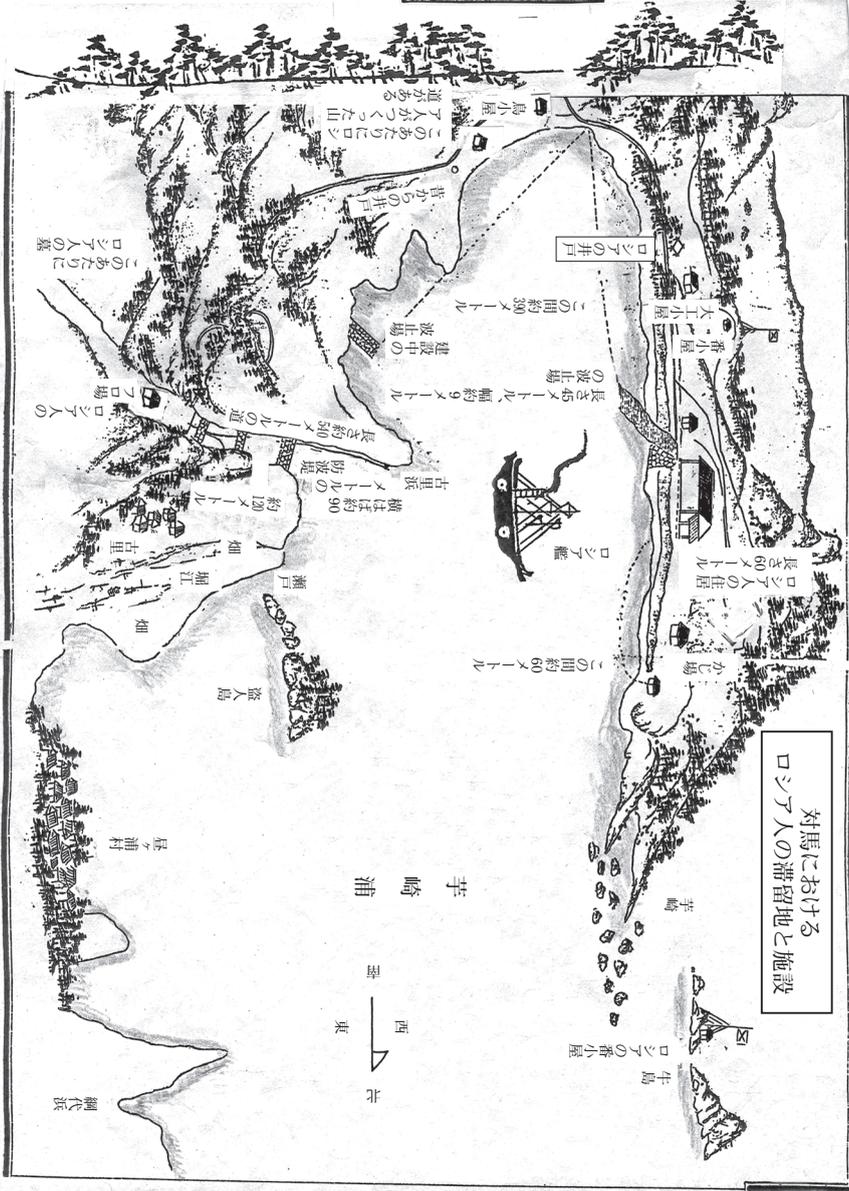
調理場（場所不明。長さ約8メートル、幅約4メートル）

手洗場（トイレのこと。場所不明）

ロシア人の墓  
高さ約二メートル、○セシチ、黒  
い塗料をぬったもの。もう朽ちて  
ないであろう。



ロシア人がつくったという山道



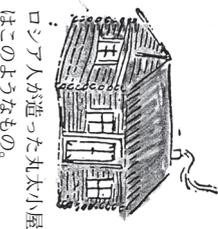
ロシア人が造った井戸



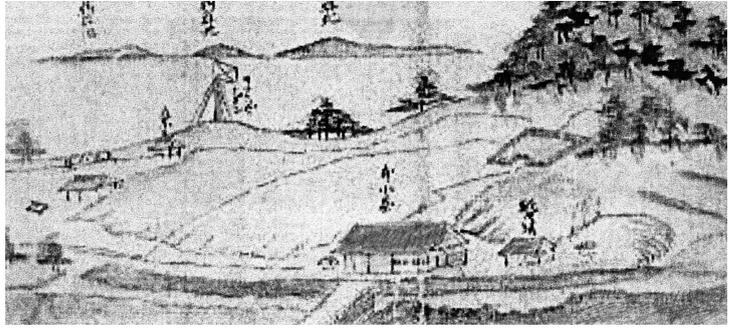
ロシア軍艦泊留地跡  
徒歩三分 (0.16km)



ロシア軍艦泊留地跡



ロシア人が造った丸太小屋  
はこのようなもの。



芋崎浦においてロシア人がつくった施設

フロ場（古里浦に一ヶ所、長さ約20メートル、幅約5メートル。ロシア式のむしフロと日本式の桶フロ「おけにたき口を付けたもの、据えぶろ」）

トリ小屋（芋崎に一ヶ所、長さ約6メートル、幅約4メートルのもの）

牛舎（搾乳場をかねる——オリファントの「対島訪問」による）

シカ小屋

丸太小屋（場所は不明。長さ約12メートル、幅約4メートル）

道路（芋崎から古里にいたる山中につくったもの）

井戸（芋崎に一ヶ所）

船着場（埠頭。芋崎と古里浦に各一ヶ所。後者は未完成におわった。大きな石をあつめて造ったもの。芋崎の

ものは、長さ約45メートル、幅約9メートルのもの）

野菜畑（芋崎に掘った井戸のちかくにつくったもの。タテ6メートル、ヨコ3メートルほどのもの四カ所）

注・この表は、「露人家作木材諸品の寄付」（『勝海舟全集 3』、「10 芋崎の建物施設等の保管」『幕末における対馬と英露』、『幕末外国関係文書 48』、オリファントの「対馬訪問」などを参照して筆者がまとめたもの。

三月十六日はロシア旗の掲揚台が建てられたときであり、ビリリヨフは作業に従事した者みなに酒をふるまった。

3・18 || 4・27  
ビリリヨフは、イギリスの対馬襲来計画をつたえるロシア皇帝

4・11  
ビリリヨフは平田と満山に、対馬にたいする将来にわたるロシアの保護について語った。その後、両人は藩主のもとにむかった（イギリスの対馬襲来計画をつたえるためか）。

4・15  
満山と平田は、二名の藩の役人とともに帰ってきた。二

の国書を藩主に奉呈したので、ぜひ府中におもむき謁見したいといった。かれの要求は執ようであり、ほっておくと城下に押しかねない勢いであった。そこでその感情をやわらげるために贈りものをすることにした。

五升入りのタル酒一荷

鶏二十羽

(奥書札方毎日記)

人の役人は、トリ・タマゴ・野菜・魚・エビなどの贈りものをビリリヨフに届けた。

ビリリヨフは、返礼として藩主に、つぎの品を贈った。

ピストル 望遠鏡 シャンペン六本 リキュール四

本 砂糖数キロ。

(前掲、ワレンチン・スミルノフ論文)

三月十九日(4・28、ロシア暦4・16)の午前八時ごろ、ロシア艦が一隻、ついでお昼ごろにもう一隻が尾崎浦に入ってくると碇泊した。平田と満山がさっそく新来の露艦をおとすれ、問い正すと、いずれも食糧を補給するために広東からやって来たことがわかった。

クリッパー艦ナエズドニク号(前回、来島したと同じ艦、リハチヨフが乗っていた)

フリゲート艦スヴェトラナ号(三一八八トン、大砲六〇門搭載。乗組員四五〇名、うち三二名が士官。同艦にはビリリヨフの弟とポサードニク号の

通訳の弟がのっていた)

3・20||4・29 午後二時ごろ、家老の仁位と平田らは、ポサードニク号をおと

ずれた。本船に着くと、艦長以下三人が盛装で、また乗組員一

同整列して出むかえた。これは仁位にとって初めての露艦訪問

であり、艦長室で酒肴のもてなしをうけた。この日はロシア皇

帝の誕生日であったので、来泊中の三艦から、三十一発の祝砲

を発射した。午後四時ごろ仁位らは退去したが、時計一個を贈

4・16 ビリリヨフとリハチヨフは、高い丘のうえから島の東部

を観察した。

4・17 この日は、皇帝アレクサンドル二世の誕生日にあたり、

祈とう式をおこない、祝砲をうった。ビリリヨフのもと

に、仁位孫一郎が正装でやってきた。牛の提供と藩主と

の会見以外、すべての条件に応じた。

物として差し込まれた。一応辞退したが、たつてこのことであ  
ずかることにした。

3・21 || 4・30

お屋ごろ、ビリリヨフ以下三人が通訳をともない、答礼のため  
仁位の宿（黒瀬村）にやってきた。酒肴をだし、意見を交換し  
た。

3・23 || 5・2

仁位はポサードニクをおとずれた。ビリリヨフは、イギリスの  
対馬への野望を説きながら、藩主への面会、芋崎の土地の租借  
のことを話題にした。土地の租借要求に関しては——昼ヶ浦か  
ら芋崎までの土地を艦の修理場所として長く借りたいといった。  
さらに艦の修理がおわり退帆してからも、藩のほうで施設（建  
物）をあずかって欲しいといい、その預り証を要求した。

これに対して、土地の貸与たよは幕府の大法があり、外国人に貸  
しあたえることができぬこと。また施設の預り証などは出せぬ  
と要求をつっぱねた。するとビリリヨフは、芋崎一帯の土地の  
貸与の申請を、対馬藩から幕府にだしてもらいたい。ロシア側  
に土地を貸しあたえる許可をえたら、その書付をくれるように  
要求したので、そのような書きつけは出せぬと拒否した。が、  
相手はなおもしつように要求したので、一応土地借用を願い出  
てみるといった書きつけを、ビリリヨフにわたし、相手の矛先  
をいったんはかわした。

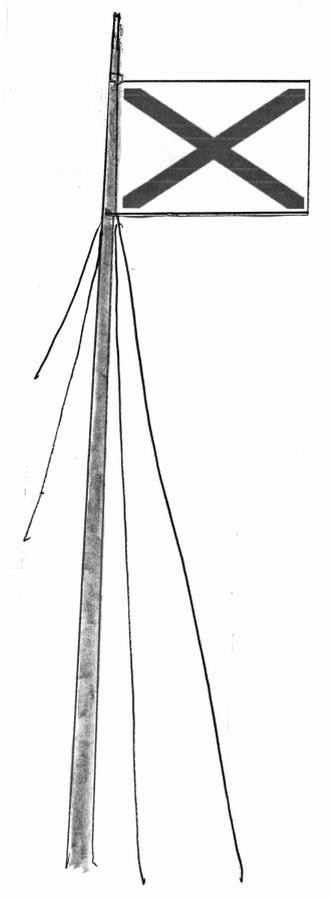
4・18

この日ナエズドニク号とスヴェトラナ号は、相ついで  
退帆した。

4・23

復活大祭（バスパ）。藩主からの贈りものを積んだ日本  
船がポサードニク号にやってきた。このとき平田らは仁  
位の書簡を手交した。

四月中旬になると、毎日のように異国船来航の警報がだされ、イギリスやロシア艦がつきつきと対馬沿岸にやってきた。



旗ざお

ロシア人が牛島の小島や芋崎に立てたロシア海軍の「軍艦旗」。

4・12 || 5・21 イギリス艦（乗組員六〇名）が府内浦に入り、北上し鴨居瀬に移動した（4・16 || 5・25）。同艦に中国人がのっていたが、文字に

くらく、ことばは通じなかった。同艦は鴨居瀬に來泊ちゅう、乗組員が上陸し、松の木を切りたおし薪にしよとしたので、薪五十束と魚をすこしあえた。

4・15 || 5・24 午後三時ごろ、西海の沖に異国船がみられ、ほどなく浅海にのり入れ、尾崎浦に投錨した。翌朝間情使がやってくるまえに退帆。

4・20 || 5・29 午後八時ごろ、鴨居瀬にまた異国船がやって来たが、ほどなく退帆。

4・21 || 5・30 午前六時ごろ、豆酸浦（対馬の下県郡）の西方の沖に異国船のすがたが二隻みられた。が、いずれも北東のほうにむかった。同日の午前八時ごろ、鴨居瀬浦にいたイギリス艦は退帆した。

また同日のお昼ごろ、ロシア艦（艦長タイドウ、備砲二〇門、乗組員三〇〇名）が尾崎浦に入り、碇泊した。

またこの日の午後二時ごろ、異国船が城下ちかくの根緒浦に入ってくると、松の木を十五本切りたおしたのち出帆した。この艦は阿須浦にのり入れたので問いただしたところ、鴨居瀬にいたイギリス艦であった。同艦は翌朝、退帆した。

4・22 || 5・31 お昼ごろ、異国船が二隻、浅海内にのり入れ、尾崎浦に碇泊した。いずれもイギリス艦であり、うち一隻は備砲五門、乗組員八〇名、もう一隻は備砲三門、乗組員五〇名であることがわかった。

注・対馬藩主報告書（4・22付）、「開国起原」、「対州芋崎停泊魯西亜船記録」を参照。

4・26 11 6・4 芋崎に滞留ちゅうのボサードニク号のランチ二隻は、西海岸を北上し、豊崎を測量し、東海岸をくだり大船越おおねこしにいたり、そこから芋崎にもどった。

5・1 11 6・8 ロシア人の一隊（士官三名、水夫三〇名）は、佐須奈浦をへて鰐浦わづらまで行き、そこから引き返し、同月六日（6・13）芋崎に帰着した。

四月二十二日（5・31）以来、芋崎に長崎からやってきた英艦二隻（J・ウォードの小艦隊——フリゲート艦アクティオン号、砲艦ダーヴ号）が碇泊していたが、同月二十六日（6・4）の午前十時ごろ、さらにイギリス艦（リーヴェン号、乗組員一五〇）がやって来て碇泊した。この艦は翌二十七日（6・5）の午前十時ごろ退帆し、残りの二艦も昼ごろいずことなく去っていった。

おなじ入江に碇泊しているロシアとイギリス艦の艦長らは、お互い訪ねたり、訪ねられたり、表面上は交歓をつづけていた。が、露艦にとって英艦は、ひじょうに目ざわりな存在であった。二十六日（6・4）に英艦の艦長が、士官をしたがえボサードニク号を訪れたとき、艦長は帽子をビリリヨフの部屋において席を立ち、どこかに行った。そのときビリリヨフはその帽子を足でけつとばした。艦長がもどってきたとき、かれはとぼけた顔をしていた。そのようなすを対馬の役人がみていた。

#### 四 幕吏、幕使とロシア人との談判

長崎奉行・岡部駿河守は、対馬藩主からボサードニク号の動向について、使者や書簡をもって報告をうけており、またみずからもビリリヨフに島から退去するよう要請の書簡を送ったが、返事はなかった。そこで四月二十四日（6・2）、支配組頭・永持亨（区）二郎と支配定役・兼松亀次郎らに、対馬出張を命じた。一行十一名は同月二十七日（6・5）幕艦観光丸で長崎を発し、対馬にむかった。

一方、幕府は四月六日（5・15）、外国奉行・小栗豊後守と御目付・溝口八十五郎（みぞぐちやとごろう）にたいして、対馬の見回りを名目に同島への下向を命じた（昭徳院殿御実記）。藩庁は幕吏がやってくる知らせを受けておらず、結果において、長崎奉行の使者と幕使は、対馬においてばったり出会うこと

になる。

五月二日（6・9）の午前八時ごろ、長崎奉行の使者・永持亨次郎の一行は、観光丸にのると、府内浦（厳原湾）を出帆し、対馬海峡の豆殻崎をぐるりとまわり、昼すぎに大口（浅茅湾）に入り、黒瀬の城山（じょうやま）の下手——明（みやう）はん島の内手にすこし入った所で碇泊した（日野、一三七頁）。その後、出むかえの小船にのりうつり、黒瀬村に上陸し、宿所にむかった。

#### 永井・ビリリヨフ会談。

両人の会見は、五月三日（6・10）、五日（6・12）、七日（6・14）と三回、ポサードニク号の艦長室においておこなわれた。このときの会談の摘要をかゝげると、つぎのようになる。

(一) 永井は先ごろ送った奉行の手紙を開いてみたかどうかまずたずね、その返事をえたいといった。(二) 艦の修理はいつごろおわるのか。(四) 芋崎に建設した小屋などは、艦の修理がおわったら、取りこわすものと理解している。(五) 大砲の件（大砲五〇門、対州へ献上する話）はどうなつたのか、たずねた。これらの問に対する回答は、つぎのようなものであった。

(一) 手紙は上海にいるリハチョフのもとに送った。ロシア語の書簡（訳文？）のみ、小官のもとに送り返されてきた。奉行の書簡の件で、おそらくリハチョフは、三、四月ちゅう江戸におもむき説明するものと思われる。

(二) 返書は、リハチョフの指示がないかぎり出せない。

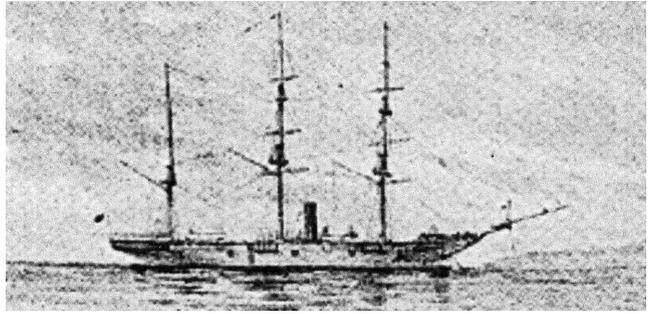
(三) 修理はいつおわるのか、わからない。おわったら出帆するつもりである。施設は今回だけのものではなく、他の艦の修理のためにも用いたい。

(四) リハチョフが御老中と談判し、対馬藩主にご沙汰がくだるようになりたい。この件は、他の国に極秘にしてほしい。

永井とビリリヨフとの談判は、不首尾におわった。そのふしまつは、幕使・小栗の一行がひきつぐかたちになった。

#### 小栗・ビリリヨフ会談。

対馬の「見回り」を命じられた外国奉行・小栗の一行が、江戸を立ったのは四月十八日（5・27）であった。一行が対馬に到着するまでの行程は、つぎのようなものであった。



小栗一行がのった咸臨丸。

四・一八（5・27、江戸出発）——中山道——大阪——五・五（6・12、下関着）——幕艦、咸臨丸、かんりんまるで対馬へむかう——五・七（6・14、府内浦着）。

小栗の一行が府内浦（湾）に着いたのは、五月七日（6・14）の午後のことであり、江戸を立てて約二十日後のことであった。一行はその後、城下の宿を出ると、黒瀬村へむかった。小栗ら幕使が芋崎に碇泊中のポサードニク号を訪れたのは、五月十日（6・17、ロシア暦6・5）のことであった。小栗とビリリヨフとの談判は、五月十日（6・17、ロシア暦6・10）、十四日（6・21）、十八日（6・25、ロシア暦7・2）と、計三回おこなわれた。

小栗はまず相手に対馬来航の理由をたずねると、島の沖で大風にあい、艦を損じたためと答えた。艦の修理はあらかた終わったので、直接藩主に会ってお礼を申しのべたいといった。それに対して小栗は、お礼をいうなら、政府（幕府）の命をうけて対馬の見分きたわれわれにいえよということである、といった。するとビリリヨフは、それはすじちがいだといった。領主に面会して、礼をいわねば、ロシア政府にたいするじぶんの立場がない。領主の家臣の話では、百日までは面会できると言うが、明日十一日（6・18、ロシア暦6・13）がその期限である。だからぜひあした面会したい。

小栗　あした面会する件は、見送ってほしい。二十五日（7・2）まで待ってもらえれば、何とか取りはかろう。

ビリリヨフ　二十五日といわれたが、その書きつけがほしい。その書面にはロシア語の訳文をつけてほしい。

小栗　承知いたしました。

かくして小栗は、ビリリヨフにたいして、藩主への面会を約束し、かつ書きつけ（五・一〇付の和文）をあたえた。

第二回目の会談のとき、小栗は大船越村にランチ二隻をのり入れた件を問題にした。（注・四月二十六日（6・4、ロシア暦5・23）——日本人はくいを三列に打ち、瀬戸（水路）を通ることを阻止しようとした事件。翌日、ビリリヨフは士官および兵二十余名を派遣、役人二名と日本人



外国奉行 小栗豊後守  
のち官軍により、上州権田村  
の河原で斬首された。

一名をとらえ、また火なわ銃二十五丁、日本刀九本をうばった。ワレンチン・スミルノフ論文を参照)。また芋崎浦に碇泊していることの意図などについて核心にふれるやりとりをおこなった。そのときの対話の要点は、つぎのようなものであった。

小栗

大船越村は、この国の要地である。他国の者の通行をゆるしてはいいない。こんご同所に来ないでほしい。非開港場およびその他の地域をかってにうろつくことは、条約にもふれることなので、よくわきまえてほしい。

ピリリヨフ

大船越を往来したのは、**絵図面(測量図)**をつくるためである。条約は通商のおきてであって、軍艦はこの適用をうけない。

小栗

そうかもしれないが、おきては双方の国民がお互い守るもの。軍艦だからといって、守らなくてよいものではない。

ピリリヨフ

お話はごもっともだが、小官はリハチヨフ提督の命をうけて絵図面をつくったものである。この件は、当人に談じてほしい。同人はたぶんいま上海にいますと思われるが、その居所ははっきりしない。

小栗

艦の修理というのは辞柄(口実)であって、本当は絵図面をつくるために碇泊しているのではないか。

ピリリヨフ

そのようなことはない。艦の修理をしていたとき、たまたま提督の命によって当所に碇泊することになり、ついでに絵図面をつくることになった。イギリスやフランスも、この地を欲しているが、小官が当地にいるかぎり、兩國ともろうぜきを働くことはできない。

小栗

親切心から当地に滞留するのであれば、貴国とわが政府が談判したうえで、処置すべきと思われる。

ピリリヨフ

その辺のことはよくわからないから、小官から答えられない。委細は提督またはゴシケヴィッチ領事から話があるはずであるから、兩人から聞いてほしい。

小栗らがピリリヨフと交渉をおこなっていた最中、尾崎浦にロシア艦が二隻あいついで入ってきた。

5・8 || 6・15 アラズボイニク号(艦長ラロンゼンベルハ、乗組員一二〇)

5・18 || 6・25 キリーベルガイダマク号(艦長A・A・ヘシュチュロフ、乗組

員二五一、備号一〇門)

第三回の会談は、五月十八日（6・25、ロシア暦7・2）におこなわれた。この日、ピリリヨフは、二十五日の藩主との謁見のを持ちだし、悪天候にかかわらず、午後二時にはかならず府中（城下）におもむくこと、乱暴ろうぜきをしないことを約束した。

小栗はこれまでの会談において、なんら成果がえられず、かえってピリリヨフが要求する藩主との謁見をじぶんの独断でゆるしてしまった。これはこの会談後、交渉にみきりをつけ、江戸に帰る決心をした。小栗の一行は五月二十日（6・27）の午後四時ごろ、観光丸にのり、帰路につき、ひとまず長崎を目ざした。

府中を出帆する前日——十九日（6・26）の朝、——小栗は対馬藩の家老らを呼びだすと、つぎのような内容の書状をあたえた。それはそれまでの交渉経過の要点と藩への要望を条項にわけて書き並べたものであり、また会談のなかで出てきた疑問点、対馬藩とロシア側との主張のちがいについてしるし、藩の答弁をもとめたものである。その要旨は、つぎのようなものであった。

- 一 領主が外国人と会った事例はこれまでにない、と先方に伝えたが、相手は聞き入れなかった。艦を修理したことの礼をのべたいとのことである。領主と面会したとき、不法行為があれば、軍艦の規則にてらして罰せられると艦長にいつてほしい。
  - 一 府中において領主と会ったら、答礼として領主は本艦を訪れるようピリリヨフはいつている。が、このことは断固としてことわるべきである。
  - 一 府中の町の見物を申ししたが、再三ことわった。ゆるしてはならない。
  - 一 牛は耕作のために飼っておるものであるから、売りわたすことはできぬ、といったら、相手は承知した。しかし、もし百姓が売りたいといえ、ば、買い取れることを艦長に伝えてほしい。
  - 一 小者の安五郎が死亡した件については、何度も談判におよんだ。ロシア人が大船越を通ろうとすると、土地の者が石をなげ、弓を射、鉄砲をうってきたので、おどしのために鉄砲をうったところ、誤って一人の左またに当たった。艦長がいつには、当人は全快したとのことである。が、長崎奉行所の使者が会見のさいに聞いた話だと、最初に鉄砲を打ったのはこちら側だといふ。一応事情をただしてほしい。
- \* 藩の答弁では、ロシア側が撃った四発の玉のうちの一発が、百姓・安五郎（大船越の番所につとめる）の胸に当たり死亡したものである。 当方も鉄砲を打ちかけたが、船は二〇〇メートルも先を行っており、玉はあたらなかった。
- 一 ロシア人は牛をうばったというが、その代金のうけ渡し、手続などについて、いま一度調べてほしい。

一 露艦におさめた品々の代金は、そのつど役人が受けとり、売主に渡ったものか。それともロシア人が直接、売主に渡したのものか。  
 一 四月四日（五・一三）、ロシア船（はしけ）が鴨居瀬村に乗り入れたが、乗組員は帰船せず、同夜民家に止宿した件を調べてほしい。

\*ロシア士官二名、日本語通訳一名が、百姓家を借りて一泊したこと。

小栗は府中を立ち江戸に帰るにあたり、ビリリヨフにあいさつ状（五・二〇付）を送った。小栗一行は、対馬に滞在することわずか二週間でそそくさと江戸に帰った（六・二〇〥七・二七）。その後、かれは病気を理由に、対露交渉の役目を辞任し、外国奉行も解任された（七・二六〥八・31）。

小栗の一行が江戸へむかっていたころ、老中・安藤対馬守は、小栗・溝口宛ての通達を二度おくれた。第一信においては、露艦の早期退帆をもとめ、また小者・安五郎を撃ち殺したロシア人の罪科を問うよう指示し、国威がたつようにせよ、と命じた（五・二四〥七・一付）。第二信では、退帆交渉がまとまるまで現地にとどまり、またビリリヨフが求めている領主との面会は拒否するよう命じた（五・二八〥七・五）。しかし、小栗らは、江戸から来たこれらの指令に接することはなかった。

いづれにせよ、ロシア側にたいする談判はかけひきなのである。小栗の姿勢は、穩便を第一とした。談判は相手の出方に応じて態度やことばをかえ、交渉を有利にするのが要点であるが、当時の幕府とその吏員は、その場をなんとかしのぐことのみを考えた。ときに実行されぬ空約束をし、のちに苦境に立たされることがよくあった。能吏といわれた小栗は、そういうタイプのひとであつたらしい。ビリリヨフは、あまり小栗をよくは思わなかった。小栗は愚人（バカ）ではないが、日本のすべてと同様、信用をおくことができない、狡猾（悪がしこい）な人間に写った（ワレンチン・スミノフ論文）。

小栗はじぶんの一存で、ビリリヨフの要求をいれ、対島藩主との会見を約束してしまった。が、対州側からは会見を拒否され、ロシア側からはその履行をもとめられ、板ばさみになった。けっきょく江戸に帰ったうえで、上司の判断をあおぐことにし帰府した。

### ビリリヨフと対馬藩主との対面\*

小栗一行が対馬を去った翌日（五・二二〥六・二八、六・一六）、ビリリヨフは問情使・戸田惣右衛門に面会をもとめてきた。会ってみると、



対馬国府中藩主 宗義和(第16代)

小栗から渡された藩主との謁見を許す旨の書状をみせられ、いよいよ窮地に立った。このときピリリヨフは、約束どおり二十五日(七・二、ロシア暦六・二〇)に、府中におもむくから、カゴや馬を用意しておくように依頼した。

当日、ピリリヨフらは、クリッパー艦ガイドマーク号で府中にむけて出発し、翌二十六日(七・三、ロシア暦六・二二)府中に着くと、隊伍を組んで藩主の屋敷へむかった。以下、ピリリヨフ一行の動向をロシア側の資料からしるすと、つぎのようになる。

\*宗義和(一八一八〜九〇、第十六代藩主。維新後は、対馬海神神官宮司)。

6・16\* 小栗ら帝国の役人らは、蒸気船観光丸で長崎へむかった。

対馬におけるロシア海軍軍人の活動についての詳細な情報は、じきに日本政府に報告された。

\*ロシア暦六月十六日は、正しくは六月十五日。一日のずれがある。陽暦の七月三日、和暦五月二十六日にあたる。

6・20 (7・7 「陽暦」 / 5・30 「和暦」) 二隻のロシア艦(ポサードニク号とガイドマーク号)が府中にむけて出発した。府中でピリリヨフをむかえたのは、家老・仁位孫一郎であった。

6・21 (7・8 / 6・1) ピリリヨフとペシュチュロフ(クリッパー艦ガイドマーク号の艦長)の二人はカゴにのり、また士官らは馬にのり、さらに護衛兵二個小隊(四〇人)は徒歩で、ロシア国旗をかかげ、歌をうたいながら



幕末の箱館のロシア領事館（安政6～慶応2まで存続）。

ピリリヨフらは、屋敷の中に入ると、脇の部屋（ひかえの間）に通され、ついで広間に案内された。その奥に藩主がひじかけイスにすわっていた。そのそばには、頭をたれた重役らが立っていた。ロシア人らが近づくと、藩主は立ちあがり、ピリリヨフらと握手をした。そのあとまたイスにすわった。藩主は何かひとこと（歓迎のあいさつか）、そばの者につぶやいただけで、その後は何もいわなかった。かれはロウ人形のようにであった。お付の者が、藩主の目をみて、勝手にものをいっているようであった。

別れぎわに藩主は、ふたたびロシア人と握手をすると、従者とともにその屋敷を出ていった。この独特な訪問は、十分ほどであっけなくおわり、ロシア側は肝心の話を何ひとつ切りだせず、目にみえる成果はゼロであった。

---

藩邸へとむかった。  
藩主の邸宅では、ヤリ・弓・火なわ銃などで武装した  
対馬兵が整列していた。

##### 五 箱館領事ゴシケーヴィチのとぼけ

幕府はこれまで何度もロシア人と直接談判をこころみだが、なんの進展も成果もえられなかったため、箱館にいるゴシケーヴィチ領事（一八一五～七五、東洋学者）に働きかけることにし、同地に在勤する村垣淡路守——外国奉行と箱館奉行をかねる——に交渉を命じた。そこで村垣は部下とともに、六月十日（7・17）領事館をおとすれ、対馬でおこっていることをこまごまと説明し、安藤閣老の要請——ポサードニク号の対馬からの退去——を伝えた。ゴシケーヴィチは、対馬における同艦のうごきや意図について何か知っていたのか、知らなかったのか、いずれもはっきりしない。が、村垣との会見のとき、同人はそんな事件があったことをまったく知らなかったといっている。かれは話しの



南部藩の三戸代官所・書役 太田弘三が描いたロシア領事・ゴシケヴィチ。  
[三戸町教育委員会蔵]。



オールコック駐日英公使

内容にけしからん点（国際法上の不法行為）があるといええた。いま箱館に碇泊している露艦アフリヤ号は、四、五日以内に出帆し、ポシシェツ港（朝鮮に接する、ロシアの版図）やオリガ（ウラディボストークの北東約二七〇キロの港町）にむかうことになっている、といい、この二つの港のいずれかにリハチョフ提督がいるはずであるから、貴意をつたえ、同人から返事させる、と回答した。またかれは在港のオフリチニッキ（リオプリーチニク）号（艦長セルヴァノフ）にリハチョフ宛の手紙をたくし、急ぎよ出港させた（称津論文、第二卷第二号）。

## 六 イギリスの介入

一方、幕府も交渉を人まかせにせず、村垣をして積極的にゴシケヴィチと折衝させただけでなく、ロシアを嫉視しているイギリスを利用し、ロシア人を追い払うことを考え、文久元年七月九日（八・一四）と翌十日（八・一五）の両日にわたって、老中・安藤対馬守の屋敷において、日英の秘密会議を開いた。

日本側からは、安藤対馬守（一八一九〜七二、万延元、井伊のあと老中となった）、酒井壹岐守のほか、目付および通訳らが出席した。なお二日目の十日より老中・久世大和守も加わった。また英国側からは、――

公使 オールコック                      ロビンソン（香港） 総督  
海軍 提督                      ホープ                      オリファント書記官

らが出席した。会議に入るまえに、オールコックより目付の退席をもとめられ、やむなくその意を容れた。二日にわたる日英会談は、対馬問題だ

けを議題に開かれたものでなく、貿易をふくむ、日英間のすべての問題について討議するためのものであった。

オールコックは、会談のはじめにこんな話をした。対馬に滞泊しているロシア艦は、そこに永住する気配がみられる。また双方、話にくいちがいがあつたやに聞いている。うわさでは先ごろ東禅寺（イギリス公使館）へ乱入したのは、対馬侯の家臣ともいう。明後日（七・一一八・一六）に、わがホープ提督は長崎へおもむき、そこから英艦三、四隻ひきつれて対馬に出むき、退帆の件についてロシア側と話しあはずである。そうするのは日英の親睦のためでもある。

安藤閣老は、それまでの幕府の対応（幕使の派遣）、ロシア側の条約違反、ゴシケーヴィチ領事への周施依頼などについて、オールコック公使に語った。以下、日英双方でつぎのようなやりとりがあつた。

公使 ビリリヨフへは、退帆を要求したのか。

幕府 退帆するよう、何度も談判したが、リハチョフ提督が江戸に行って話しあうといい、取りあつてくれなかつた。

公使 ロシア艦は、修理を理由にして、これからも来航するように思われる。

幕府 ホープ提督が対馬に行くとき、とりもつ役人がいなくてはつごうが悪いので、長崎の役人や通訳を同行させてほしい。

公使 役人らをイギリス艦に乗せると、ロシア側の疑惑をまねく恐れがある。役人らを乗り組ませるのは、ひかえた方がよい。ロシア人は、何か成算があるから、やすやすと退帆しないのであろう。そうでなかつたら、すみやかに退帆しているはずである。

日本側のいらだちは、同時にイギリス側のいらだちでもあつた。イギリスはロシアに先をこされ、対馬を根拠地とされることを懸念するあまり、日本政府に肩入れをした。が、イギリスは極東における英露の利害の対立から干渉にのりだしたのである。しかし、イギリス側の関与は、日本のためというより、自国のためを考えてのことであつた。

幕府 日本政府がいちばん知りたいのは、提督が対馬へ行ったとき、どのようにロシア人と談判するつもりかという点である。

提督 艦長と会つたら、ここに碇泊する筋（理由）がないから、早急に退帆するよう申し出るつもりである。が、このことを相手に伝えるまで手順が



イギリス海軍のジェームズ・ホープ提督 (1808～81)

あると思われる。

幕府　ゴシケーヴィチ領事に周施を依頼し、本人の承諾をえているのに、さらにイギリスにも頼んだとなると、まずいので、その辺のところは注意したいと思っ  
っている。

提督　小官が談判するときは、じぶんの責任でおこなうものであり、日本政府とは  
まったく関係がないものである。

幕府　非開港地に軍艦を碇泊させることは、条約に違反するものと思われる。この点どう思われる。

提督　それはイギリス人に質問するまでもない。まったく条約に違反するものである。

ロシア政府の心底はわからぬから、艦長は条約違反で罰せられるかどうか返答はできない。が、こういう事件が起ったばあい、条約締結国の者があつまり、会議をひらき、違反行為がないようにするのが筋である。

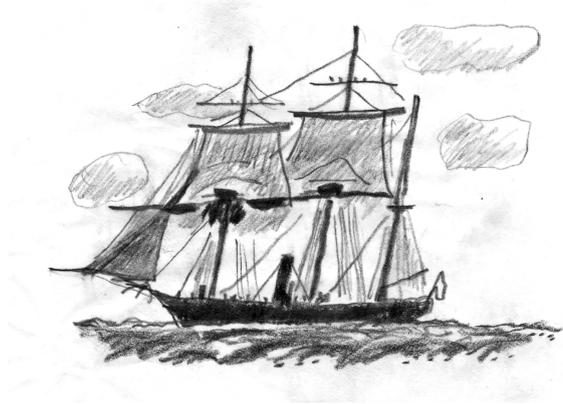
幕府　イギリスでは、右のようなことは起らないと思われる。もし艦長がそのようなことをやれば、政府から罰せられるのか。

提督　もし小官がロシア人のように、部下にやらせ、それが政府に知れたら、部下は罰せられず、小官が処罰される。

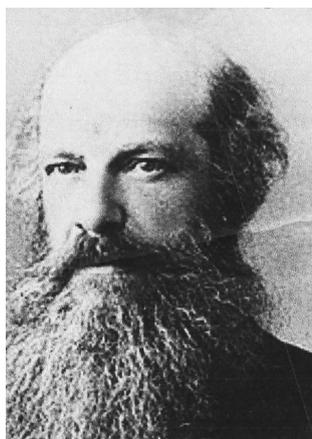
ついで提督は、英艦が測量した対馬海図を日本側にみせた。それをみて幕府側は、対馬が良港である印象をもち、対馬の開港を提議した。

幕府　対馬は港もよいようなので、ここを開港場としてはどうか。

幕府は江戸と大坂の開市・開港を延期ちゅうであり、その代償として、開港場——箱館・神奈川・新潟・兵庫・長崎——のうち、兵庫を開港するかわりに対馬を開港することを提案したが（祢津論文、第二卷第三号）、オールコックは日本側の申し出を本国に伝えることを請けあい、つぎのようにいった。



イギリス海軍の  
2等木造砲艦 リングダヴ号



オリファント書記官

公使 対馬の土地のようすはわからないので、何ともいえない。ホープ提督がこんどそこへ出かけ、地勢を見聞したうえで可否について申しあげるつもりである。もし開港場としてよい所なら、ロシアにとってはなほだ不つごうであろう（開港場として独占できぬ意、逆に日本にとっては、つごうがよい）。

もし対州のうちの一港を開港場としたら、防備についても考える必要がある。

幕府 開港を延期している、兵庫と新潟は、不つごうがあるので、代わりに対馬を開港場にしたい。

日本側は、対馬代替案<sup>だいたい</sup>をイギリス側に提示し、会談をおえた。

七月十一日（八・一六）、ホープ提督は帰国するオリファント書記官をともない神奈川からリングダヴ号（艦長クレギー、備砲四門、乗組員九〇）にのると、長崎へむかい、当港で上海から来ていたエンカウター号（艦長ジェームズ、備砲二門、乗組員一八〇）に乗りかえ、リングダヴ号とともに対馬へむかった（長崎から対馬まで二四〇キロ）。リングダヴ号が府中湾に姿をみせたのは、七月二十一日（八・二六）の午後四時ごろであり、午後八時ごろ艦長クレギー、士官二名、オリファント、通訳・品川藤十郎らは上陸すると、あずま屋のような小さな家（使者屋）で、問情使らと会い、来航の目的をつげ、ポサ

ードニク号の動静などをたずねた。

夜半ではあったが、会談の場所へ案内するというので、リングダヴ号の艦長らと十二名の水兵からなる護衛隊は、三〇分以上も夜道をあるいて、会談場へむかった。民家の戸は、かたく閉ざすように命じられていたから、明かりは見えず、一行は星空のもと、足音をしのばせるように町中を歩いた。

やがて町はずれのある邸内（藩邸？）に入ると、二本差しのサムライの集団がいる部屋にみちびかれた。その中に威厳と落つきのある上級役人（四十五歳ぐらいの家老）がいた。かれは四人の同役を紹介したあと、細長い別室にイギリス人を招いた。そこに

長さ20フィート（約6メートル）

幅2フィート（約60センチ）

ほどのテーブルがあり、その両側に長イスが置かれていた。テーブルや長イスに、赤い布が布いてあった。また四本の燭台のうえには、バカでかいローソクがともっていた。

テーブルのうえに喫煙器具（きせる、タバコ、火だね）が置いてあった。イギリス人は、小さい湯のみでいくどか茶をのみ、タバコを吸い、内容のないお世辞をさんざんいったのち、本題に入るときが来たとおもった。

オリファントは、われわれは対馬に来た最初の外国人でなく、すでにロシア人が来ているはずである、というと、家老はじつに意外だといった顔つきをし、通訳に聞きなおさせた。家老はいった。

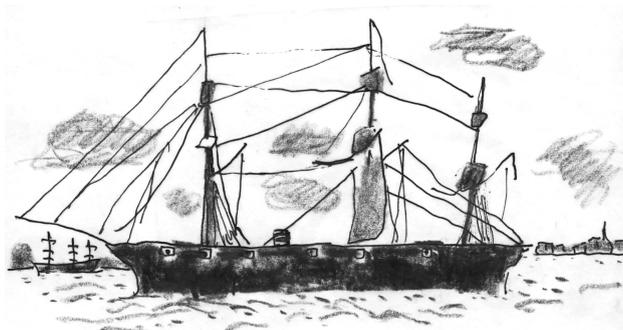
——ロシア人は当地に来たことはありません。

このことばを聞いて、オリファントはすっかり当惑した。

——ロシア人がいま対馬にいる、といったたしかな情報を得ています。われわれは真偽をたしかめに、ここにやって来たのです。

——それは事実ではありません。ロシア人は当地にはいないし、ここにやって来たこともありません。

らちのあかないやりとりが二時間ほどつづいた。が、やがて対馬側の信頼をじょじょに得ると、家老は本音を吐くようになった。ロシア人が六カ月まえからこの島に居すわっていること。連中は家をたて、土地の者と紛争をおこし、その間に一人が殺されたこと。藩主や家中の者はみな恐慌状態にあること。ロシア人がこの島にいることを秘密にしておくよういわれたこと。もしばらしたら、たいへんなことになるとおどされたこと。



イギリス海軍の蒸気コルヴェット艦 ‘エンカウンター’号

ロシア人がこの島にやってきたことはない、とウソをついたのは、仕返しをされるのがこわかったからだといった。対馬が、招かざる客（ロシア人）の存在から解放される見通しを伝えると、その場に居あわせた日本人全員は、よろこびと感謝の念をあらわにした。が、ロシア人がいる場所にイギリス人を案内する勇氣はなかった。ただ島の反対側へぐるりと回ってゆくと、大きな湾（浅茅湾）があり、そこを捜せば、かれらをみつげることができるとだけいった。

深夜の会談がおわったとき、空は白みがかっていた。一行は本艦にもどった。やがてリングダヴ号は七月二十三日（八・二八）の午前六時ごろ、府中港を去ると、対馬島の南端（対馬海峡）をまわり芋崎へとむかった。一方、長崎でわかれたエンカウンター号の動向だが、その後同艦はどうしたのか。この艦は長崎からただちに浅茅湾へむかい、七月二十二日（八・二七）の午前八時ごろ、いったん芋崎へのり入れかけたが、ひきかえし、午前十時ごろ吠崎浦（かきまき）に碇泊した（日野、二三二頁）。さっそく問情使・戸田惣右衛門らが出むいたところ、ちょうどピリリヨフが来ていた。

戸田が手まねによって聞いたところでは、この艦はイギリス艦であり、江戸から長崎へ来、そこからさらに対馬に来たこと、僚艦があり、今夜にも当所にやってくるかと伝えた。

二十三日（八・二八）午前八時ごろ、リングダヴ号は浅茅浦に入ると、箕形浦口（みのがた）の辺田島（へたのしま）——のうちのわに艦をとめた。リングダヴ号は、府中を出帆して、海岸にそって約四〇マイル（六四キロ）航海したのち、湾を二分したような所（浅茅浦）に入ると、その中を進んだ。岸辺でもかなり水深があった。オリフアントらは錨をおろさぬうちに、ランチ（はしけ）にのり移ると、水をかきながら、入江から入江とこいでまわるように進んだ。が、どこもかしこも秘境であった。

すると突然、岬の木枝のしげみから、先のとがった帆柱（マスト）がみえた。ついで芋崎の岬の先端をまわると、海賊船のたまり場のような入江に、一隻の快走帆柱砲艦が碇泊していた。ポサード（ポサード）ニク号である。同艦は、二本のロープでもって、岸辺の二本の大木の枝につなぎとめられていた。また厚板（ブラッド）が陸にかかっていた。思わぬところでロシア艦を発見してびっくりしたのはイギリス人だけではなかった。艦長ピリリヨフら

ロシア人も、突然の闖入者にびっくりしたらしい。オリファントらは、艦長室に招かれ、そこで茶菓子のもてなしをうけた。ビリリヨフは、水路調査にやってきたが、命令どおり島の測量もおわった、と語った。船室の窓からみえたものは、

庭つきの木造家屋（兵舎） 牛小屋 トリ小屋

などであった。その後、イギリス人は上陸すると、ロシア人の施設を見学した。

ロシア国旗がはためく病院（芋崎） 搾乳場兼家きん小屋（芋崎） ロシア式むしフロ（古里浦） 休息所（芋崎） 菜園（芋崎、井戸のそばに四つある）

その後、オリファントは五ヶ国条約のことをそれとなくいうと、ビリリヨフは、

——小官は船乗りであり、外交官ではない。条約のことは何も知らない。知っていることといえば、命令だけである。と、いった。

さらに原住民とは、もめごとを起したことはなく、なかよくやっている。いちばん近い村でも、ここからちょっと離れているから、めったに村人と会うこともない、といった。

その夜、オリファントらは、リングダヴ号で旗艦エンカウンター号が遊航している沖合へむかった。翌朝（二十三日＝八・二八）、オリファントはホープ提督をおとずれると、前日の報告をした。ホープはすぐリングダヴ号に移乗すると、対馬湾（浅茅浦）に引きかえさせ、ついでボサーニク号がいる入江へとむかった。

こんどはビリリヨフ艦長がやってきて、ホープ提督らと食事（昼食？）をともしながら、友好的な態度で時局について話しあった。このときホープ提督は、満州沿岸のオルガ湾に行き、そこにいるリハチヨフ提督と会い、ポサードニク号の対馬退去に必要な命令を出してもらおう、といった外交的意見を披らうした。

またホープ提督は、このとき退帆をのぞむ旨の書簡（一八六一・八・二八〃和暦七・二三）をビリリヨフに手交し、同人はその返書をしたためたが、その中で対馬占拠の命をうけたことはなく、陸上の建物を見学したことからもお分りだろうという。そして十月にシベリア経由で本国に帰るといった（甲必丹ピリレッフ手記——一八六一・八・一七日〃和暦七・二三）。

同日（七・二三、八・二八）の夕刻——仁位孫一郎ら役付のものは、トリや野菜などを手土産にリングダヴ号、エンカウンター号をおとずれると、供応をうけ、艦内を案内してもらった。折からエンカウンター号には、ビリリヨフも来あわせていた。かれはホープ提督にたいして、こびを売るような態度で接していたらしい（仁位の報告による）。

七月二十四日（八・二九）——ビリリヨフは士官一名、通訳をともない黒瀬村にいる仁位の旅宿をおとずれると、土地の租借を中心とする十二ヶ条の要望にたいする許諾書（たのみを聞き入れた書きつけ）をくれるようせまった。が、うまくゆかなかった。

このとき仁位は、昨二十三日（八・二八）、ビリリヨフが英艦（リングダヴ号？）を訪問したときの会談内容を聞きだすことができた（日野、二三七頁）。英露は対馬をめぐってそれぞれ思惑を語ったが、イギリス側は五ヶ国条約を楯にとつて、ポサードニク号の行動を非難した。ビリリヨフは艦修理小屋の撤去を約束したという（日野、二三七頁）。

この日（七・二四〃八・二九）の午前十時ごろ——

リングダヴ号……………箕作浦口に碇泊。

エンカウンター号……………吹崎口に碇泊。

の二艦は退帆し、大口を出て、西南へむかった。……

八月四日（九・八）、エンカウンター号は、箱館に入港した。函館奉行所の役人が同艦をおとずれ、ホープ提督に会おうとすると、同人は病のため面会できなかった。代って艦長から対馬の状況を聞きだすことができた。それによると、ロシア艦がまだ滞泊していること。陸上に建物をたて、永住するつもりのようにみえること。明後日、箱館を出帆し、江戸にむかうが、老中に会ったら、露艦を退帆させるよう言上するつもりであること、をホープのことばとして伝えた。

この情報に接した箱館奉行・村垣は、五日（九・九）ゴシケーヴィチをたずね、露艦の退去を重ねて交渉した（日野、二五一頁）。

この間、ロシア側は幕府の画策をどこまで情報として知っていたのか。ロシア側は、英公使オールコックが、「日本の外国奉行（老中が正しい）と長時間の会見」をおこなったことを知っていた。その後、ホープ提督が公使館の書記官オリファントをとめない、エンカウンター、リングダウの二艦とともに対馬にむかったことも知っていた。日本人は、イギリス人が島へ上陸することには好意的でなかった。が、

---

オリファントは大胆、かつ執拗さを発揮し、土地の役人からロシア軍艦が対馬に在ることを無理やり聞き出した、という（ワレンチン・スミルノフ論文）。

そして島影に碇泊するポサードニク号が、イギリス人に「発見されたのは八月十五日であった」という（注・和暦七・二三、陽暦八・二八、ロシア暦八・一六、一日のずれがある）。

一方、村垣のもとには、アムールへ出張中の調役・水野正太郎から、ニコラエフスク（アムール川の河口ちかくの左岸にある町）においてリハチヨフ提督と会ったとの報告が入っていた。村垣の考えでは、リハチヨフの箱館来着を待って、ロシア艦退去の談判をおこなうつもりであった。しかも、村垣はつぎのように幕府へ具申することを忘れなかった。——政府としてはイギリスの力をかりて露艦を退去させることを考えているようだが、それは門前のトラをこばみ、後門のオオカミをうけ入れるようなものである。将来禍根（わざわいのもと）をのこすことになりかねないと。

箱館における村垣とゴシケーヴィチとの交渉は、左記のように約二ヵ月つづいた。

六・一〇（七・一七） 第一回……対馬において露艦が滞泊している事実をつたえ、その善処（退去）をもとめた。ゴシケーヴィチは、沿海州にいるリハチヨフ提督に申し入れの趣旨をつたえることを承諾した。

七・三(八・八) 第二回……このとき幕使・小栗の対馬報告を伝えた。

八・五(九・九) 第三回……箱館に入港したエンカウンター号の艦長からえた対馬報告(ロシア人の永住のようす)にもとづき、露艦の退去をかさねて求めた。

八・一〇(九・一四) 第四回……村垣はピリリヨフが持ちだした土地租借要求の件を話題にした。ゴシケーヴィチは、ピリリヨフがじぶんの判断で勝手にやったことであること。いずれ退帆の件を命ずるロシア艦が対馬にむかうことを伝えた。

一方、七月二十四日(八・二九) 大口を出て、西南にむかったというリングダヴとエンカウンターの方だが、二艦はどこへ行ったのか。ホープ提督らが目ざしたのは、ロシアの越冬地——オリガ湾(ロシア人は同地を「聖ウラジミール湾」または「サントオルガ湾」とよぶ)であった。イギリス艦はオリガに——八月二十四日～二十五日(ロシア暦)まで滞泊したらしい、しかし、ホープは、リハチョフに会えず、対馬から撤退をもとめる抗議文を残して去った。けっきょく両者は会えなかったが、リハチョフ提督がこの湾に到着したのは、文久元年八月十三日(九・一七、ロシア暦九・五、一日のずれがある)であった。

ところでホープ提督がオリガに残していたリハチョフ宛の抗議文は、いかなる内容のものであったのか。その要旨はつぎのようなものである。——ポサドニク号が、対馬に長期にわたって滞泊し、海岸に家作をつくったりしていることから、永住するのではないかといった懸念が江戸で生じている。日露条約では、日本政府の許可なく、開港場以外、海岸に建造物をつくったり、海岸を測量することはできない。ましてや船を乗り入れることもできない。対馬における施設維持に関する貴下の考えを聞きたい。江戸にいる外国人にポサドニク号がもたらす悪い影響を、貴下に喚起し、状況しだいでは、本国の訓令をもとめざるをえない。

日本の領土において、諸外国が条約で定められていない建物を目にすることは、小官の職務に反する。もしそのような建造物が企図されたときは、日本政府に知らせるのが小官の務めである(麓 慎一「研究集会報告 ポサドニク号事件について——ロシア海軍文書館所蔵……」と「魯国ノコムドールニ送リタル 書翰写シヲ寄スル英公使ノ書翰」「露艦対馬ニ停泊一件」所収を参照した)。

結果において、リハチョフ提督は、ホープの勧告にしたがうのであるが、そのことについては後述することにし、先に進むことにする。

幕府は一方において、箱館にいる村垣をせっつき、ゴシケーヴィチ領事と談判させていたが、こんどはロシア外相へ、ロシア艦の退去をもめる請要の手紙をかき、それをゴシケーヴィチに託した。この書簡は、**老中・久世大和守と安藤対馬守**の連名で出された（文久元・八・二三付 九・二七）。その要旨は、つぎのようなものである。その意識をかかげる。

——書簡をもって申し入れます。

本年二月中旬よりヒリレフ（＝ビリリヨフ）という者が指揮する貴国の蒸気軍艦ボサジニカ（＝ボサードニク）は、わが対馬島の西港に碇泊しています。はじめは船の破損を修理するためと称し、しばらく滞留するということでした。対馬は辺鄙な所であり、木材その他の要求によく応じることができませんでしたが、領主はなるべく扶助いたしました。滞在が長びくと、変事が起るかも知れず、わが政府より外国奉行・小栗豊後守と役人とを派遣し、見聞させました。しかるに貴国の将兵は、じょじょに上陸するようになり、同島の芋崎と古里のあいだに小屋や畑をつくり、山道を切りひらき、永住する気配がみえました。

それゆえ、外国奉行が艦長と談判いたしました。艦長がいうには、イギリスやフランスも対馬を占拠したいと思っている。リハチュフ（＝リハチュフ）の命により、同所に番兵と見張所をおいたが、政府の意向でもある、と申したてました。豊後守が島を去ると、むりやり領主と対面したり、地所の借用を強要しました。退去するようすはみられません。貴国においては、どんな事情があつて、このような処置に及んだのか、われわれにはわかりません。貴国は箱館その他の開港はもちろんのこと、北エゾ地の件で、ときどき使節を送り、条約面でわが政府と談判におよんだことがあります。今回、**提督や一船将（艦長）**ひとりの考えで、対馬にやってくる、既述のことをなしたことは理解できぬことです。もっともやむをえぬ事情があるとしたら、貴国政府より使節または書簡をよこし、わが政府と交渉すべきです。が、通達はなく、船の修復を理由に、その土地に長居することは解せません。このことはリハチュフ提督がやったことで、政府の関知していないことなのか。船将であるヒリレフひとりの考えから出たことを、コモドールのさし図のようになっているのか。

とにかく、いまのべたような事情なら、条約をむすんだ国々へも影響があり、かつつごうもあるので、外国奉行・野々山丹後守以下役付きの者を同島につかわし、船将と面会のうえ、退去のことを申し入れさせるつもりです。これ以上長びくと、人心が折りあわぬ時節がら、どんな故障が起るかかわりません。日露両国の懇親がそこなわれるのではないかと心痛いたしております。

もしこのことが貴国政府の主意（おもなる考え）とすれば、さっそくコモドールまたは船将へ下知し、早々に島から退去させてほしい。またコモドールや船将のひとりの考えから出たことなら、日露両国の信義をうしなうことであり、早急に退帆させたうえ、相当の処置（分）があるものと思われま

箱館にいる貴国のコンシユル・コシケウイチへも、同所奉行から退帆の件を談判させていますが、事情がよくわからず、虚実はかりがたく、右のような重大事件は、当然両国政府で協議すべき筋のものであり、このことを申し入れます。よくお考えのうえ、早々に退帆させてください。拜具謹言。

文久元酉年八月二十三日

久世大和守 花押

安藤対馬守 花押

注・「魯西亜国外国事務大臣へ差遣わし候書翰」『開国起原』所収。また「魯艦対馬二停泊一件 八」外務省編纂『続通信全覽 類輯之部 二九』にも、全文が収めてある。

幕府側のこの抗議書は、ロシア外相の手にわたる前——八月二十五日（九・二九）までに、ポサードニク号は退帆した。

七月十二日（八・一七）——箱館に露艦アフリヤ号が入港した。この艦はリハチヨフ提督の返書をもたらしした。のち同艦は対馬へむかった。先にオプリーチニク号が運んできたゴシケウイチ書簡をよんだりハチヨフは、ポサードニク号の対馬退去に同意した。かれはオプリーチニク号をそのまま、対馬にやり、ビリリヨフに退帆命令を伝えさせた。同船は七月二十六日（八・三一）対馬に到着した（日野、二五五頁）。

一方、長崎奉行所は、支配組頭・中台信太郎以下役人を対馬に出張させた。一行は七月二十六日（八・三一）府中に到着した。二十八日（九・二）中台らは芋崎へむかいビリリヨフと会見した。このとき、ビリリヨフは、壱岐の沿岸の測量をおこないたいとつげ、かつ水先案内人を要請した。新来のオプリーチニク号は壱岐測量のため出帆した（七・三〇―九・四）。

八月十四日（九・一八）ビリリヨフとオプリーチニク号の艦長セリヴァノフは、黒瀬村の旅宿にいる中台信太郎をおとずれると、明十五日（九・一九）対馬を退帆すると伝えた。そのあとポサードニク号は、箱館から江戸へ、オプリーチニク号は測量のため朝鮮へいくことをつげた。ビリリヨフは、両艦退帆後、陸上につくった建物や施設がこわされることを心配し、そのままあずかってくれと中台にたのんだ。中台はそれを諒承した。

ポサードニク号は、八月十五日（九・一九）の昼ごろ、ついに芋崎を退帆すると、浅茅湾に出、それより北上し、箱館をめざした。……しかし、芋崎ではまだ残務があった。黒瀬村には対馬藩家老・仁位孫一郎や問情使・平田茂左衛門らがいた。仁位は中台をおとずれると、ロシ

ア人がつくった家屋をこわす件をロシア人と談判してくれとたのんだ。ピリリヨフは退去するまえ、仁位に施設（小屋）および器物（木材）など  
のあずかり証をもとめた。が、渡さなかった。幕府は村垣をしてゴシケーヴィチ領事と交渉させ、対馬につくったロシアの建造物の引きわたすか  
贈与をもとめた。日露の長い交渉のすえ、ロシア人が必要とするとき、建物を返すといった条件付でこの問題は一応結着した。そのため芋崎の施  
設をとりこわし、資材や備品を囲いおくよう、江戸の対馬藩に幕命がくだったのは十月一日（一一・三）であった。十一月下旬、対馬藩は役人を  
現地にもかわせ、建物をこわさせ、そこにあった器物（障子、かま、なべ、おけ、材木、イス、ベンチ、テーブル、つるべのほか、小舟・オー  
ル）など、ことこまかにリストをつくり、それを仁位の名をもってロシア側に渡した。なお建物や波止場の取りこわしが完了したのは、十一月下  
旬から十二月上旬にかけてのことか。

**破却の跡**のうちいまに残るものは、**井戸（芋崎）**や**山道（芋崎）**だけである。ほかに兵舎のそばの石畳の道、フロ場にいくつか石があったらし  
い（クリッパー艦アブレク（Abrek（英））号の館長 Pilm が、海相コンスタンチン大公に宛てて出した報告書「一八六二・五・六付」ワレンス  
チン・スミルノフ論文）。また対島に砲台をつくるとき、上原元帥によって発見された、岩石にうがった旗ざお用の穴の跡があったという（平岡  
雅英『日露交渉史話』）。芋崎のロシア施設と器物の保管交渉がおわると、

アフリヤ号

オプリーチニク号

の二艦は、八月二十五日（九・二九）あい前後して出帆した。

オリガ（ポシエート湾）において、ロシア領事から日本政府の抗議を伝えられたリハチヨフは、さらにイギリスの横ヤリ（干渉）によって、や  
むをえずポサードニクを退帆させることに決した。が、露艦の退去問題は、意外にもかんとんに解決したために、ひょうしぬげの感がある。計略  
家のリハチヨフは、なぜホープ提督の退去勧告をいともやすやすとうけいれたのであろうか。じつは対馬事件は、リハチヨフがいちばん恐れてい  
た外交問題に発展するきざしがみえたことである。

イギリス外務省へは、ラッセル外相宛のオールコック公使の報告、さらにハモンド外務次官宛のオリファント書記官の報告などが、届いていた（二〇・二八〇和暦九・二五）。ラッセル外相は、それを駐露イギリス大使ナピール（ネイピール）に送り、十一月十二日（和暦一〇・一〇）ロシア政府に通告せよ、とつぎのように訓令した。

——イギリス政府は、ロシア政府が日本領土を侵略しないものと確信している。ゆえにわが政府は、条約締結国間における領土侵略、貿易妨害、居留地以外の占拠などの企てを拒否する協約をむすぶ用意がある。

この訓令は十九日（和暦一〇・一七、ロシア暦一一・七）に、露都ペテルスブルクに着き、同日ナピール英大使は、外相ゴルチャコフをたずね、かれの目のまえで訓令を朗読した。

これにたいして、外相はつぎのようなことをいった。

——ロシアは日本にたいして領土的野心や対馬占領の意志をもっていない。対馬における施設は、対馬侯または日本政府から露艦に許可されたもののように記憶している。わが国は土地租借の永久的契約をなす意志をもっていない。皇帝の命令および海軍省への報告をうけとったのち、この件に関して決定的回答をなすであらう。

ナピール大使は、さらにこうもいった。

——対馬侯は、同島の占領にはぜったい反対であり、軍艦や建物の撤回を熱望している。同地点は地理上重要であるから、露艦の碇泊は、イギリス提督の疑心を刺激した。

ナピールはさらに外相ゴルチャコフに、イギリス外相の訓令や提議に注意をばらうよう求め、ロシア皇帝（アレクサンドル二世）にこれを伝えるために、ホープ提督とピリリヨフ艦長との間で交された文書（書簡）、リングダヴ号の艦長クレギイの報告などを外相に手渡した（祿津正志

「六 聖・ペテログラードに於ける英露の交渉」〔文久元年〕 露艦ポサドニック号の対馬占拠に就いて（「三・完」に収録を参照した）。

ナピールは二十九日（和暦一〇・二七、ロシア暦一一・一七）にも外相ゴルチャコフと会見した。このときゴルチャコフは、

——ロシアは対馬の占領も所有ものぞんでいない。事件はすでに解決した。海軍大臣のコンスタンチン大公が帰京したら、本件についてかれと相談するつもりである。

ナピール英大使が、ゴンチャコフ外相と会見した結果の感触は、つぎのようなもので、相手の談話からえた感じを本国に報告した。

——ロシア政府は、イギリスから提出された文書を見て、列強が激昂し反対運動をおこしていることを知り、自己の侵略をひかえねばならぬであろう。イギリスは公正かつ敏速に抗議すべきである。クリミア戦争で失敗し、ポーランドでぐずついているロシアは、その勢力の拡大範囲を中国や日本に発見し、その領土を押しひろげ、アジア大陸に大きな領土を得、カラフトの大部分をえた。本件（対馬事件）は条約の侵害にあたる。

ロシアはクリミア戦争の傷手から回復せず、国内問題（農民一揆など）や内政改革に多忙をきわめていたために、対馬問題でイギリスと対立することを避けたかった。ゴルチャコフ外相は、（ロシア暦）一八六二年一月二十日付（和暦・文久元・一二・二二）の回答を幕府にあたえ、箱館領事の訓令によってロシア艦が対馬を退去したことを伝えた。

ロシア人は、七カ月ちかく、芋崎に滞泊したのであるが、騒ぎのもとになった対馬は、その後も外国船の来航におびえたことであろう。文久元年十月六日（一一・八）の午後一時ごろ、外国船一隻が府中港に入ってきた。藩の間情使が船をおとずれたところ、イギリスの蒸気軍艦であることがわかった。

船名	エルチヨリン	（または）	アルチェルレン
船将	ロス	（　　）	ハローウス

徳富猪一郎『近世日本  
国民史』開国初期篇』

「御側毎日記」より。

同艦は北京を出帆後、長崎に寄り、そこから府中にやってきたものようだった。

使者屋で朝鮮語の訳官に筆談させたところ、イギリス人はロシア人が立ち去った跡をみたいといった。藩庁では視察をことわると、相手の疑惑をまねき、かついろいろ不つごうが生じてはまずいと判断し、許可することにした。



海軍大臣 コンスタンチン  
大公

同艦は翌七日（一一・九）の昼ごろ、芋崎に着くと、藩の支配むきの者といっしょに芋崎の施設を見物した。その後黒瀬村へも立ち寄り、村を一見したのち八日退帆した。

このイギリス艦について、日本側はいろいろ表記しているが、既記のようだと、どうもはっきりしない。検分に訪れたのはイギリスの砲艦「アルジェリン」号 *Algerine* であり、艦長はハロウズ *Hallowes* といった (*Shipping Intelligence — The Nagasaki Shipping List and Advertiser* 一八六一・七所収を参照)。

#### 七 ロシア海軍首脳のある計画

いったいなぜ、ポサードニコフ号は日露条約の第三条を犯してまでも対馬にこだわり、そこに半年以上も居すわったのか。人間の行動には、かならずや何らかの動機や理由があるはずである。だれがなんのために対馬滞泊と施設の建設を企画し、それを推進したのか。それを立案した張本人は、ロシアの中国海域艦隊の司令長官リハチヨフ大佐（のち少将）であった。さらに同人の計画に便乗したのは、当時のアジア侵略主義者であった海相コンスタンチン大公であった。対馬占拠計画が対馬藩や日本政府（幕府）の知らないところで秘密裡に起り、進行していた。

リハチヨフとコンスタンチンが、はじめてこの件で話しあったのは、一八六〇年一月（ロシア暦）のある日の夕方であった。秘密会議の場所はクロンシュタット軍港。リハチヨフは、関係文書（書簡）の中で、ときにロシア語のアルファベットを暗号がわりに使った。同人によると、

Bとは対馬

Xとは実行者ピリリヨフ艦長

のことだという。リハチョフは、なぜこの対馬島に着目したのか。それにはいろいろ理由があった。

リハチョフは、こう考えた。アムール川（ロシア東部と中国東北地方との国境およびその近くを流れ、オホーツク海にそそぐ）の南方から——豆満江（北朝鮮・中国、ロシアの国境を形成し日本海にそそぐ）に至る沿海地域（ロシアの呼称・プリモルスキ——東は日本海、西は中国に接する）を獲得することは、ロシア海軍の将来にとって重要な意義がある、と。

ロシアが領する海は、大洋（おおうみ）から隔離されている。ロシア海軍は、つねに自然環境のきびしさ、良港不足になやんでいるが、この新地域には、その障害がない。この地域の気候は、地中海のそれに及ばないにせよ、航海上の大きな障害になっていない。さらに大洋や極東における人口稠密地へももっとも近い利点がある。ロシア海軍が陸軍力にくらべ、発達がおくれたのは、ロシアがヨーロッパにもつ海は、すべて内海（島や岬にかこまれた海）であり、その海軍力は自国の海のなかに閉じ込められていたからである。アムール川から豆満江におよぶ全地域は、海によって取りかこまれており、その海をタタール海峡（間宮海峡——シベリア東部とサハリンとの間に位置）と呼ばれている。

この内海にあるのは、日本帝国の列島であり、そこに三つの通路（海峡）が大洋に通じている。すなわち、

宗谷海峡（サハリン島と松前島「北海道」とのあいだ）

津軽海峡（松前島と本州とのあいだ）

朝鮮海峡（朝鮮と本州とのあいだ）

さいごの朝鮮海峡の押えとなっているのが、海峡の真んなかにある**対馬島**である。いままで人に気づかれなかったが、地理的状况からその地点の重要性に注意をひかれる。



少将リハチョフ

ここでもっとも重要な地点は、第三の海峡（朝鮮海峡）である。が、いままで人はこの地域に注意をはらわなかった。朝鮮海峡は、中国や日本に直通している。対馬島は最近の諸地図では二つの島に描かれているが、じっさいは一つの島を構成しているようである。この島は領主が支配している。この海峡における、ロシア海軍の分艦隊や船舶にとって、対馬は集結したり、休息したりするのに最適である。

昨年の大半をわが国の海岸——聖ヴラジミール湾の周辺ですごしたイギリス海軍のアクテオン号とダヴ号の行動（測量）には、若干の秘密がつきまといっている。かれら是对馬に行き、そこでよい湾を発見した。対馬に関するイギリス人には、よくないうわさがある。われわれは対馬から注意をそらすべきではない。とくに時を失すべきではない。

この問題のある種の解決には、交渉と平和的方法によるのがよいというのが、小官の意見である。イギリスやその他の国民に、この地に地歩を確立させないことである。それはつぎのような手段で達成できる。

- 一 全島ないしその一部分を皇帝陛下の領地として獲得する。
- 二 すくなくとも倉庫、病院その他の施設のために、海岸に若干の土地を（得ること）、およびそこにわれわれの分艦隊や船舶の滞在をうけ入れることを譲歩させる。
- 三 この島をすべてのヨーロッパ人に閉鎖することを主張しつづける。

日本人は第三案に大した困難もなく同意するであろう。しかし、その約束は当てにならない。政府は弱体であり、ヨーロッパ人を恐れているので、その約束は何ら保障をあたえない。小官の立場と権限から考えられるのは、分艦隊の一艦を海図をつくるために対馬島に派遣し、そのしごとをできるだけ続行させることである。

注・コンスタンチン大公宛のリハチョフ少将書簡——一八六〇・五・

二一（ロシア暦）、万延元・四・一三（和暦）、一八六〇・六・二（陽暦）。

このようにリハチヨフは、ロシア海軍の集結地として、早くから対馬に着目し、イギリスなどの列強に先手をとられるまえにロシア領とすることを画策した。リハチヨフから来た二通の手紙に歓喜したのは、折からストレリナ (Strelina) ——ペテルズブルク郊外のフィンランドに近い別荘地) にいた海相コンスタンチン大公であった。かれは一月の夕方、クロンシュタットでリハチヨフといっしょに作成した計画の進捗によるこび、リハチヨフの書簡を皇帝アレクサンドル二世にみせた。皇帝はリハチヨフがポシエツト湾に部隊を上陸させ、そこを占拠させたこと、責任をおそれず、人の先に立つてことをなすリハチヨフの処理と機知に満足した。

コンスタンチンは、対馬に関するリハチヨフの覚書 (書簡) を、一八六〇年七月二十二日 (ロシア暦) ——万延元・六・一七 (和暦) ——八・三 (陽暦) ——外相ゴンチャコフや皇帝がいるまえで読みあげた。皇帝は対馬の現実的な重要性をすぐ理解した。しかし、外相のゴンチャコフは、かれのいつものくせで、このことがロシア人と日本人の間のあらそいにならないか、政治的問題が発生しないか懸念した。かれは対馬問題から解放してくれるようコンスタンチンに懇請した (かかわりたくない意)。この件を外交案件とせず、もっぱら海軍案件としてリハチヨフにゆだねることを提案した。

本件を外交上の協約としないで、ロシア海軍の取引とすることにコンスタンチンは満足したが、リハチヨフへは、島の権力者 (領主) と地方的に接触するだけにし、公的な抗議が出ないように努めるよう訓令した。

注・リハチヨフ宛海相書簡——一八六〇・七・二六 (ロシア暦)、万延元・六・二二 (和暦)、一八六〇・八・七 (陽暦)。

コンスタンチンの意をうけたリハチヨフは、ポサードニク号の艦長ピリリヨフに秘密指令 (極秘) を送った。その要旨はつぎのようなものである。

——領事ゴシケーヴィチを箱館に送りとどけたら、直ちに朝鮮海峡の対馬におもむくことを要請する。この指令にイギリス人 (英海軍のアクティオン号の艦長ウォードによる測量図) がつくった未完成地図の写しを添える。対馬の位置の重要性は、他国民に先きがけて知っておく必要がある。だから貴下は、できるだけ早く、対馬の入江に到着したら、そこに艦を収容し、まずは入江の、そのあと対馬全島の、さいごに朝鮮海峡の海図の

作成につとめねばならぬ。またこの地域の状況や資源についても、情報収集にあたること。すべての事柄を、慎重かつ詳細におこなうよう注意すること。

注・ペリリヨフ宛リハチョフ書簡——一八六一・二・二（ロシア暦）、万延二・一・五（和暦）、一八六一・二・一四（陽暦）。のちに日本政府（幕府）やイギリス政府との外交問題に発展するロシアの対馬作戦について、領事ゴシケーヴィチ（一八五八〜六五まで箱館に在任）は、どこまで知っていたのか。この点に関して、研究者はいろいろな意見をのべている。

知らなかったという否定説。

伊藤一哉『ロシア人の見た幕末日本』……………「リハチョフが対馬について進めようとしていた作戦の内容を、ゴシケーヴィチは知らなかつ

た可能性がある」（一六九頁）。

ビクター・シュマギン「リハチョフ……………」クリモト氏は、ゴシケーヴィチは、作戦について何も知らなかったとの意見を示す『航海日誌』から読み解く対馬事件」

知っていたという肯定説。

ビクター・シュマギン「前掲論文」……………「日誌には、次の引用通り、リハチョフがゴシケーヴィチに作戦を伝えたとみられる記録が残っている。

——「一八六〇年四月八日 箱館」ゴシケーヴィチは対馬についての意見にほとんど賛成して  
いない。」

対馬事件が明るみになり、文久元年六月十日（7・17、ロシア暦7・4）幕府の訓令を受けた箱館奉行・村垣淡路守が、ロシア領事館をおとすれ露艦の退去をもとめたとき、ゴシケーヴィチはこの件についてまったく知らなかったと答弁している。が、このとき同人はこの件についてわざと知らなかったふりをしたようだ。じっさい彼は知っていたと思われる。このとき対馬にポサードニク号が来泊して五ヵ月ほどになる。

同年二月十五日（3・25、ロシア暦3・13）リハチヨフはクリッパー艦ナエズドニク号で江戸に来、その後対馬の尾崎浦におもむき、ピリリヨフ艦長と会った（文久元・二・二九、4・8、3・28「ロシア暦」）。リハチヨフは江戸滞在中に、箱館にいるゴシケーヴィイチに要請文をだしている（文久元・二・一五、3・25、3・13「ロシア暦」）。その内容の骨子は、つぎのようなものである。

——小官はしばらく日本の沿岸にとどまらざるをえなくなったことを話しました。江戸にロシアの利益代表を常駐させることが必要です。小官には、江戸に長くどどまるよう貴下を説得する勇気がありません。しかし、X（マリコフ）に下された命令（マリコフ）について、貴下は知っています。この件で日本政府が何らかの問題を出した場合（事件が発覚したらの意）、かれらを安心させるために満足のいく説明をあたえて下さい。ロシア政府の意図について、発生しうるあらゆる猜疑心を取りのぞいて下さい。小官はこれから上海にむかいますが、現地に着いたら、艦隊から艦を一隻送るようつとめます。（中略）

この件に関する貴下の考え、またXに関するニュースを知らせてください。貴下の江戸滞在を利用し、ロシア政府にたいする日本人の信頼をかためてください。

小官のほうからは、目的達成のため、現況がつづくかぎり、つねに小官と連絡がとれるように、わが艦隊の軍艦一隻を貴下の管轄下におくことを約束します。

（中略）わがロシア艦と商船の交通のために、ぜひともB（対馬島の意）に海軍基地をつくることが望ましいことはおわかりでしょう。この問題は、わがロシア政府がのぞむように最終的に解決する必要があります。現時点でこれを急ぐ特別の理由はありません（強行は不信を生む意）。ロシア政府は、それを避けることを望んでいます。

注・ゴシケーヴィイチ宛リハチヨフ書簡 江戸発——一八六一・三・一三（ロシア暦）、文久元・二・一五、一八六一・

三・二五（陽暦）。

対馬藩や日本政府のあずかり知らぬところで、ロシア人によって着々と進んでいた対馬占領計画は、この島のすべてを手に入れることではなくて、ある目的のためにその一部を占拠することであった。それは武力をもって入手するのではなくて、現地政権（対馬藩）との交渉——ロシア艦

隊と領主との私的な取引によって手に入れようとするものであった。しかし、対馬藩と折衝してみてもわかったことは、同藩が領地の一部をロシアに割譲（わけ与える）したり、ロシアの庇護をうけるといった可能性はひくく、それは甘い期待にすぎなかった。

対馬占領計画のじっさいの立案者リハチョフの考えでは、大君政府とじかに折衝しないかぎり、島の占拠は不可能であることだった。外交的手法によって日本政府と交渉するにしても、あれこれ心をくばる必要があった。たとえば、(一)ロシアの意図は他の国々の企てに警鐘を鳴らすことであり、このことを日本人に納得させる。(二)日本政府にロシアの真の意図をさとらせないようにする。(三)対馬島に関するロシアの策謀（はかりごと）が明らかになり、緊急事態に至ったとき、中国海域艦隊司令長官（リハチョフ海軍少将）ひとりが責任を負い、ロシア政府は関知しないものとする。(四)本官（リハチョフ）の命令がないかぎり、どんな事態になろうとも、芋崎のロシア艦を退去させない。

リハチョフが、ポサードニク号を対馬島の入江——芋崎浦にやった主なる目的は、全島周辺の海の深浅を測量させたり、朝鮮海域の測定作業に従事させることであったが、それ以外にある秘密の任務をあたえていた。不凍港をもたぬロシア海軍にとって、冬季に氷結しない港は垂（す）ぜんの的であった。ロシアは折から東太平洋のセヴァストポリをさがしていたが、対馬がそれに匹敵するように思えた。

けっきょく対馬においてロシアが狙ったのは、浅茅湾の芋崎浦をまず海軍の投錨地にし、ついで芋崎浦を特別な施設をもった海軍基地にするこ  
とであった。芋崎一帯をロシア海軍の拠点（活動の足場）とすることが、ピリリョフにあたえられた秘密の指令であった。しかし、芋崎における  
基地建設は当初の見込みに反して英米の妨害により頓挫をきたした。かくしてロシアが対馬の一角を手に入れ、そこを海軍基地とする計画は完全  
についでたのである。

### ロシアの領土的野心。

江戸のイギリス公使館員としてロシアの対馬占拠事件にふかく関わっていたローレンス・オリファント（一八二九〜八八、イギリスの外交官、  
著述家、政治家）は、大のロシアびらいであった。かれはロシア人が外交においてひじょうにこうかつなのを嫌っていた。オリファントのロシア

観をよく耳にしていたのがイギリス留学中の森有礼（一八四七〜八九、明治前期の政治家）であった。森のみるところ、ロシアはつねに奸智をやしない、外見はおとなしく、内にはオオカミのようなどん欲さとワシの爪をもち、すきあらば他国の土地をうばうことも辞さぬことをよく知っていた。

対馬占拠計画は、単にロシアの海軍大臣とその幕僚の陰謀事件にすぎなかったのか。それとも閣僚や皇帝らもその計画にふかく関わり、国家ぐるみの陰謀だったのか。皇帝アレクサンドル二世は、コンスタンチン海相の報告をきき、対馬の重要性を理解したというし、ゴンチャコフ外相はこの問題をリハチョフに託することを提案したというから、対馬事件は皇帝の諮問をへた国家ぐるみの密議を実行に移したものといえよう。

## 八 対馬をテーマとした詩歌やエッセイ

古くは『万葉集』巻一に、遣唐使、遣新羅使人らがよんだ歌がおさめられているし、現代文学にはその数こそすくないが、何篇か対馬を主題とした詩がある。たとえば『対馬島誌』を著わした日野清三郎のものに、つぎのような詩があるという（橋川文三「対馬幻想行」）。

我尋ネテ思フ 所那レノ処ニカ求メン

\*ふらりと意。

飄然トシテ 独り立ツ海津ノ頭

\*＊海岸の船着き場のさき。

遠来 訪ネント欲ス 竜宮ノ蹟

\*遠くから

神秘深ク蔵ス 古対州

この詩などは、埠頭にたたずんだ旅人が、ふと竜神と乙姫が住むという海の底の宮殿の跡を訪ねてみたいと思つた心境を、現実と夢の風景のなかで詠んだものであろう。

安西 均（一九一九〜九四、福岡師範本科中退、元朝日新聞記者、日本現代詩人会会長）には「対馬」と題する詩がある。



安西 均

巖原にて

畠に蒔いた種麦は

ことごとく群鴉に荒され尽した

椿の林を走る稲妻いろの山猫

物語のなかの王子のやうな

高麗雉がひとり歩いてゐる間道

白鳳の上古からの銀山

だが野梅の花は銀ではないから  
雨の中で散つても音がしない

しばし逍遙す貝殻の径 石の堀  
ここ巖原町 万松院山門

満身に朱をたたへ  
伝不詳の仁王

何をか怒る。

\*\*\*仏法をまもる神である金剛力士。その像が寺門の左右に一對おかれる。

\*\*\*万松院は対馬藩主宗家の菩提寺。

\*\*\*大化元年（六四五）から和銅三年（七一〇）までの時代。

\*\*\*朝鮮半島から対馬に輸入されたキジ。

朝鮮海峡にうかぶ孤島——対馬では、時はゆっくりと流れている。作者はカラスについはまれた



橋川文三

麦畑の跡、つばきの林や小徑にみる野生のネコやキジなどを現実的な田園の風物としてみている。一方、藩政時代からいまに残る歴史的遺物に目をとめ、とりとめもない想像をする。

エッセイとしては、橋川文三（一九二二〜八三、昭和期の評論家、政治学者、東京帝大法学部卒、明治大学政治経済学部教授）の「対馬幻想行」（初出『中央公論』昭和42・10）が抒情性に富むひじょうにすぐれた作品である。上対馬の中央部の志多賀したかという小さな村に生まれ、そこで四歳まですごした作者は、戦前（一九四二）の春にいちど故郷を訪れ、戦後は二十数年ぶりに、夏季に広島から飛行機、連絡船をのりついで、古里をたずねた。四十すぎの作者が、幼年期をすごした対馬を再訪したいと思ったのは、しばらく会わぬ伯父から、いろいろ昔ばなしを聞くほかに、父母とともに過ごした往時をなつかしむ気持ちにつきうごかされたからであろう。

ひとは歳をとると、回顧趣味や郷土愛がこうじたりするものらしい。四歳ごろの子どもの記憶はどれほどたしかなものかわからぬが、筆者が福井地震（昭和23）を経験したときは四、五歳であったが、それをいまでも鮮明におぼえているから、作者の幼児の記憶はそううすれていないはずである。

作者の乗った壱州丸いしゅうまる（五八六トン、一五ノット）は、博多を午前八時半に出帆すると、午後二時ごろには対馬の国府・厳原いづはらの港についた。久々にみる対島の島影はむかしどおりのものであった。対馬名物のとんび（ワシたか科の大きな鳥）の「ぴーいひょろひょう」の声こゑが作者を出むかえ、その心をなごませた。

作者は町中の旅館で一泊したのち、三津島の竹敷たけしきにむかい、そこから仁位行にいの沿岸航路の小汽船にのると、瀬戸内海のように風光のよい湾内を進み、瀬戸口とよばれる港口をぬけ、浅茅湾に入った。左手の遠方に、灰色に突きでた低い岬がみえた。

それが文久元年、ロシア軍艦ポサドニックが不法占拠をこころみた芋崎である。その向うには茫茫ぼうぼうとして（広くはっきりしない意）朝鮮海峡がひろがっている。

作者は仁位で上陸した。折あしくタクシーがつかまらない。途方にくれていると、地元の親切な人間が車にのせてくれ、目ざす志多賀まで運んでくれた。

作者が古里でたしかめたかったものはいくつかあったが、それらは皆子どもたちの記憶に結びつくものであった。

- (一) お宮（こうそんじゅ）の公孫樹（いちちょうの漢名）があるかどうか。
- (二) 志多賀小学校の校庭の片すみにあった井戸の有無。
- (三) 作者の幻想の中にある美しい水路と竜宮。

二つか三つの作者は、青々と茂ったいちちょうの樹の下で一心不乱にぎんなんの実をひろった記憶があった。その実を家にもち帰ったとき、それを食べると死んでしまうよ、と母におどされたことをよく覚えていた。

お宮というのは、元村社という小さな社殿であり、その前に大きないちちょうの樹があった。それをみて作者は、子どもたちころぎんなんの実をひろったのは、この樹であると確信し、ほっとした。井戸は、その水をのむのが今回の旅の目的のひとつであった。つるべで飲んで飲んだその水は、日本中でいちばんうまい水であった。（旧制）中学二年のとき、肺炎により高熱をだした。そのときの作者の幻覚の中で、ごくごくとのんだのもその水であった。その水は昔にかかわらず、冷たく、澄んでいて、うまいものであった。

作者には夢か幻覚かはっきりしないが、奇妙な記憶がある。小学生の作者と父は、櫓こぎ舟にのってながいながい水路を行った思い出である。それはうんざりするほど退屈な舟たびであった。作者が幻影の水路とおもったものは志多賀―敵原の海路、また幻の竜宮と錯覚したものは、鴨居瀬と沖島との間のせまい水道（紫瀬戸）を抜けたところにある、住吉神社、にちがいないと思われた。

このように作者は、子どもたちころから心につっかえていた原風景（幻想）を、一つずつときあかしてゆく。読者はそこに書き手の推理作業をみるようだ。



井伏鱒二

## 九 井伏鱒二と対島事件

井伏鱒二（一八九八—一九九三、昭和期の小説家。早大仏文科中退、芸術院会員、文化勲章受章）は、対馬においてピリリヨフ艦長と談判した小栗豊後守に関心をもち、同人について筆をとっている。筆者はこの異色ある作家の最晩年、S：社の編集者につれられて三度ほどお会いした。同氏の遺稿（二〇〇字詰め、十二、三枚？）は、S：社の『小説S』にのるはずであったが、家族の意をくんで発表されなかった。その「解説」をかいた筆者は、いまもその中味をはっきりと覚えていてる。

前半は遣米使節団の監察として渡米した小栗のエピソードをかたり、後半はボサードニク号上でのピリリヨフとの三度にわたる談判のようを記したものである。資料名は掲げてなかったが、おそらく徳富猪一郎の『近世日本開国初期篇』明治書院、昭和11・4）を利用したものであろう。よみずらいピリリヨフとの対話録（古文書）を、現代風にあらためて用いられていた。「幕末研究家の宮永 孝氏によると」と、筆者の名が出てきたのは光栄である。

作家・井伏鱒二氏をおもう。

蛇足ながら、井伏邸訪問記をしるしておく。

井伏氏が亡くなる数年前の晩秋のころであったろうか。いまその正確な年月日はおもいだすことができない。S：社出版部の編集者・K氏（故人）に連れられて萩窪の私宅を訪れたことがある。午後一時半ごろ訪問したが、すでに映画監督の今村昌平氏が着座し、井伏氏と何やら話をしていた。

井伏宅は萩窪の閑静な住宅街にある。住居は平屋であり、表札は出ていない。その代わりに「紙片」が門柱に張りつけてあり、「井伏」とよめる。表札を出すと、夜中にひとが盗んでいくらしい。玄関に入ってすぐ右手に八畳の間があり、そこに大きな座卓が置いてある。

井伏氏が来客と対座するのはそこである。やがて奥方が茅巻——ウィスキー——、焼酎などを運んで来ると、それをテーブルの上に置く。井伏家では客に出す、酒の肴といえは茅巻なのである。

井伏氏は紺色の木綿の着物を着、首に襟巻きをしていた。九十歳をすぎても、焼酎をちびちびと飲むのである。口数のすくない人であり、低い声で話をする。映画の話が中心であったが、よもやまの話をした。

「ウーアー」「そうですかね…」「ウン」

「マラッカはいいところ。新保（光太郎）と一緒に南方に行った」（昭和十六年「一九四一」の十一月はじめごろから年末にかけて、文学者の費用がはじまり、井伏・新保らはマレー方面にやられた）

（原爆映画の話）

「広島の方でしょう」

「あーそうですか」「エー」

（戦争中）

「バスを押したことがある。町まで押して行ったな……」（木炭でうごくバスを押した意か）

「五十代は（からだに）気をつけねばならない……いちばんあぶない」

（写真帳を見ながら）

「昔の家なんか、無くなった……」

「こういう家が多いな……」

「岡山にいい家があった。永井君と行った」

「医者（の）データーは、三年あったら焼いてもよい」（法律によってカルテは五年間は保存のきむがある）  
対談中、井伏氏はときどきせき込む。痰がつまるためである。

「魚を買っていたこともあるけれど、魚はとれぬから……」

（今村監督の質問）

——地主はどのような生活をしていたのですか？

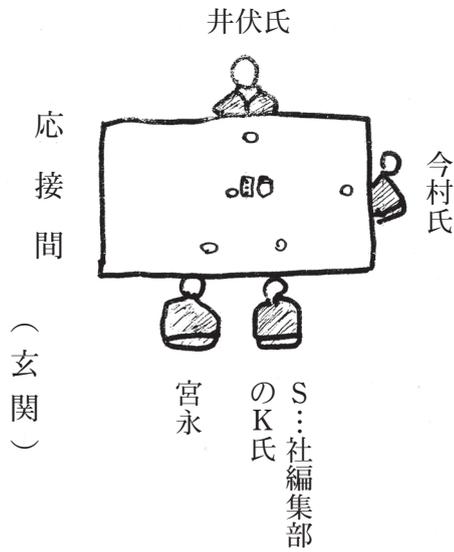
「本家は百姓をしていた。本家まずつぶれた」

「小学校は六年制——小さい小学校があった。……生活のことは全然知らなかった」

「広島県——山林をかえした（山林は開放すべきである）。県会議員は勢いがあった。県庁の役人に□□が入る。山林——松たけの山、大事にした。農協——ぼくの村なんか、金を払ってしまった。簿記はこまかすことができる」

「……芸術がある。商業学校出たひとより、商科大学（二ツ橋）を出たひとの方がよかった」（給料がよい意）

「岡山の雑誌出た……」



井伏語録

○ 若いころ出版社に勤めていたが、奥付のない本をつくったことがある（笑）。

- (翻訳の印税か何かをもらい) 早稲田の銭湯に入ったとき、大金を盗まれた(笑)。
- 住込みの女中に著名人の手紙(井伏狹)を盗まれ、あとで買ってもどすのが大変だった。
- (手紙といえは、太宰治の書簡がたくさんあるらしい)
- わたしが書いたものはすべてでたらめである(笑)。
- (作った話の意。晩年、フィクションにいや気がさしていたようだ)

## むすび

ロシアによる対馬占拠計画がらみで、思い出されるのは、第二次世界大戦後のソ連による**北海道占領計画**である。日本の敗色が濃厚とみられた一九四三年(昭和18)三月の時点で、米國務省対外政策諮問委員会の極東班では、早くも戦後の日本をどうするか、その計画案が起草されていた。米政府の考えでは、日本をつぎのように解体することであった。

領土……朝鮮、台湾、満州、委任統治諸島のすべてが奪われる。

軍事……日本を武装解除する。軍事、経済をコントロールする。

政治……軍国主義から解放された新政府の樹立。マスコミ(新聞、ラジオ)を通しての民主化の推進。最終目的は、太平洋地域の平和と安全のために、日本を平和と友好を愛する一国家として諸国の仲間入りをさせる。

一九四三年十一月に開かれた、戦後処理をめぐってのカイロ会議に出席したのは、ルーズベルト(米)、チャーチル(英)、蒋介石(中)の三人である。が、このとき朝鮮の独立、台湾や満州の返還、日本が第一次世界大戦後に得た海外領土の放棄などを要求することを宣言した。

これが、戦後処理をめぐっての第一回目の会談とすると、第二回目のそれはヤルタ会談であった。この会談は一九四五年二月四日〜十一日まで開かれ、ルーズベルト(米)、チャーチル(英)、スターリン(ソ)ら三人による会談であった。このときドイツの最終作戦、ドイツ降伏の三ヵ月後にソ連が日本に宣戦することがきめられた。ソ連は対日参戦の見返りとして、トルーマン新大統領に、

カラフト（シサハリン）南部——古くはアイヌ人が居住し、南半分は日露戦争後日本領——とこれに隣接するすべての島  
千島列島 北方領土

などを占領地とすることを求めた。第二次世界大戦はおわりに近づきつつあった。

一九四五年三月十日、東京大空襲。五月七日、ドイツは連合国に無条件降伏した。八月六日、広島に原爆が投下された。八月八日、ソ連は日本に宣戦を布告した。九日、長崎に原爆が投下された。八月十五日、日本はポツダム宣言（無条件降伏の勧告）をうけ入れ降伏することに決した。

八月十六日——スターリンは、北方領土だけではなく、北海道の半分を占領地とすることを求めたが、十八日トルーマン大統領はソ連の要求を拒否した。八月二十三日、スターリンは極東地域の日本軍捕虜約五〇万人をシベリアに移送することを命じた（シベリア抑留）。

九月二日——日本は東京湾上のミズリー号上において降伏文書に調印した。

日本が連合軍に降伏した翌八月十六日——ペンタゴンの統合戦争計画委員会は、連合国による日本の分割統治計画案なるもの起草した。それはドイツが降伏後に、米・英・仏・ソの四カ国に分割統治されたように、日本も米・英・ソ・中華民国の四カ国によって統治されるものであった。

北海道および東北（福島県あたりまで）……………ソ連

本州中央（関東、信越、東海、北陸、近畿）……………アメリカ

四国……………中華民国

西日本（中国および九州）……………イギリス

なお東京三十五区は、ベルリンが四カ国に分割統治されたように、米・英・ソ・中の共同管理下におく計画であった。

ソ連はアメリカにたいして日本を分割統治することを強く求めたが、GHQのマッカーサー総司令官は、その要求を拒否した。八月二十二日トルーマン大統領は、日本を間接統治することを承認した。一九四六年二月——イギリス連邦占領軍（イギリス、オーストラリア、ニュージーランド、インド軍など）は、中国地方と四国を統治した。

けっきょく日本は、戦勝国による分割占領こそまぬがれはしたが、GHQの指導のもとに、日本政府を介した間接統治を受けることになった。いまも北方領土問題はそのままになっているが、ソ連によって北海道や東北地方を奪われなかっただけでも不幸ちゅうの幸いである。

しかし、わが国は一九五一年九月、サンフランシスコ講和条約が発効するまで、独立国家として主権がなく、六年以上もGHQの間接統治を受けた。わが国は講和条約締結の日に調印された安全保障条約により、アメリカ軍の日本駐留をみとめ、こんにちに至っている。北方領土、沖縄および日本本土の基地問題が、課題としてのこり、それがいまも尾をひいている。

安政元年（一八五四）十二月二十一日に、ロシア皇帝ニコライ一世の全権大使ブチャーチンと、大目付・筒井肥前守、勘定奉行・川路聖謨とのあいだで結ばれた日露和親条約（下田条約ともよばれる）は、第一条から第九条までである。その第三条の要旨を意識すると、つぎようになる。

日本政府はロシア船のために、箱館・下田・長崎の三港をひらく。

いまよりロシア船は、難風により被害をうけたときは、修理をうけ、薪水・食料などを給される。石炭がある所ではその補給をうけ、金銭をもって支払い、もしそれが乏しいときは、品物をもってつぐなう。

ロシア船は、難破のときをのぞき、三港のほか、日本の港にけつて入ることはできない。

この条文によると、ロシア船は難破といった急を要する事態にいたらぬかぎり、三港以外の港に入ることはできないのである。が、ロシア人は日本とのこの契約条項を無視してまでも、対馬の浅茅湾に入ってきて、芋崎浦に半年以上も居すわり、あまつさえ陸地に諸施設をつくり、土地の入手（租借）をこころみ、海軍基地建設をもくろんだ。

当時のロシア政府の極東における積極政策、併合主義は、清国から沿海州（シベリア東南部、日本海に面する）・アムール地区を獲得すること

に成功し、またカラフト全島の領有欲をつよめた。ロシア艦による対馬占拠事件は、拮抗する英露の勢力の対立が生んだものであり、イギリスがいち早く対馬の測量をこころみたことから、ロシア海軍の一部のものは疑心暗鬼にかられ、他国に先きがけて対馬の基地化に先べんをつけようとした。

それはかならずしもロシア政府の意図したものでなかったにせよ、海軍大臣と幕僚がいったいとなつての計略であり、対馬をして沿海州・日本海支配の拠点にしようとしたものといえる。いふなればマルタ島がイギリス人にとって地中海支配の拠点とすれば、対馬はロシア人にとってのマルタ島であった。日本の安危にかかわる対馬問題は、さいわいイギリスの介入により解決した。

対馬事件の研究史をふり返ってみて、学問はたえまなくうごいていくこと、進歩しているものだとということを知った。明治の末期にわが国ではじまったこの事件に関する研究は、大正・昭和・平成とうけつがれ、こんにちに至っている。平成期に入って、内外の研究者が在外の史料を発掘して新たな光をあてようとし、その成果を逐次発表している。しかし、新たな事実にしても、既知のものを補足し、上ぬりしたものにすぎず、とくに読者をびっくりさせるような大発見はない。筆者の研究は、ひとの遺作に上ぬりをしたものにすぎず、こんなかい珍しい図版や写真を添えることができたことで、多少新味はあろうか。

ひとはやゝもすると、海外資料をありがたがるきらいがあるが、国内資料（『続 通信全覧』『勝 海舟全集』『幕末外国関係文書』）にも、まだまだ捨てがたいものがある。また単行本として最もすぐれているのは、対馬の郷土史家・日野清三郎（一八六八～一九四二）が、対馬藩の藩政史料をあさって書きあげた労作『幕末における対馬と英露』（東京大学出版会、昭和43・12）である。元陸軍技手（大砲製造の専門家）であった著者は、厳原町役場に勤務するかたわら、地の利を生かして対馬史の研究に従事し、ほかに『対馬島誌』（対馬教育会編、昭和三年）などを執筆した。

『幕末における……』の筆者は、昭和八、九年（一九三三、三四）ごろ、すでに原稿をかきおえていたらしい。が、同書には**要塞島**（砲台が三十一ヶ所ある）である対馬の地理についての記述がすくなくならずあるために、長いあいだきょううていにしまい、発表の機会をうかがっていた。やがて太平洋戦争がはじまり、その翌年昭和十七年二月にわかに亡くなった。戦後、史家・長 正統（一九三三～）によってその成稿が発見され、ついに日の目をみたのである。

同書にはロシア側とやりとりしたときの記録——藩の生の史料がたくさん引用されていて、事件の裏面史を照らしだしている。外国の資料にみ

られぬ核心にふれたものもある。筆者は本稿においてそれらを利用し、大きな利益をえた。亡き故人に謝意を表しつつ、ペンをおく。

主なる参考文献

(初期の論文 他)

武蔵虎太「文久元年露艦の対州碇泊に就きて」『歴史地理』第六卷第三号所収、明治37・3。

高田利吉「幕末露艦の対馬占拠」『歴史地理』第四十三卷第一号所収、大正13・1。

衿津正志「文久元年露艦ボサドニックの対馬占拠に就いて」立命館大学『法と経済』第二卷第二号、三号、四号所収、昭和9年。

徳富猪一郎「第十六章 露艦の対馬占拠」『近世日本 開国初期篇』所収、明治書院、昭和11・4。

(史料)

外務省編纂『続通信全覽 類輯之部 二九』(魯艦対馬島二停泊一件「一」～「十」および付録「二」～「三」)を収録、雄松堂出版、昭和62・3。

『大日本古文書 幕末外国関係文書之 四十八、五十二』東京大学出版会、平成13・3、平成25・4。

大塚武松著『幕末外交史の研究』千代田出版印刷株式会社、昭和27・11。

日野精三郎著 正統編『幕末における対馬と英露』東京大学出版会、昭和43・12。

注・元陸軍技手の著者・日野精三郎(一八六八～一九四二)は、対馬に永住し、町役場に勤務しながら歴史の研究に没頭し、藩政史料により執筆したのがこの労作である。生の史料を引用し、生硬な文体だが、参考とする点が多かった。

ローレンス・オリファント筆「対馬訪問——ロシアの対馬侵略事件」『英国公使館員の維新戦争見聞記』所収、校倉書房、昭和49・8。

『勝 海舟全集 2』(開国起原Ⅱ)、勁草書房、昭和54・7。

『勝 海舟全集 3』(対州魯人上陸の件 上中下を収録)、勁草書房、昭和54・11。

平岡雅英著『日露交渉史話』原書房、昭和57・9。

『兵要日本地理小誌』陸軍兵学寮、紀元二千五百三十三年刻

対馬教育会編『対馬島誌』「非売品」、昭和3・7。

伊藤一哉著『ロシア人の見た幕末日本』吉川弘文館、平成21・4。

(最近の論文)

麓 慎一「ボサドニック号事件について——ロシア海軍文書館所蔵Φ410 112385を手掛かりに」『東京大学史料編纂所 研究紀要 第

15号』所収、平成17・3。

ビクター・シュマギン「リハチョフ航海日誌」から読み解く対馬事件』『東京大学史料編纂所 研究紀要 第25号』所収、平成27・3。  
ワレンチン・スミルノフ「イヴァン・フォードロヴィチ・リハチョフの対馬計画」(二八六〇～一九〇四)『東京大学史料編纂所 研究紀要 第  
有泉和子訳  
28号』所収、平成30・3。

(新聞記事他)

国際ニュース事典『外国新聞に見る日本』(二八五二～七三 原文編 本編)(株)毎日コミュニケーションズ、平成元・9。

Laurence Oliphant 著 Episodes in a Life of Adventure or moss from a rolling stone, William Blackwood & Sons, Edinburgh and London,  
MDCCCLXXXVII.

注・この中对馬訪問記がある。

The Nagasaki Shipping List and Advertiser, No. 9, July 27 1861, No. 26, September 25, 1861

The North-China Herald, Sat. September 14, 1861 (Shipping Reports)

<https://en.wikipedia.org/wiki/Tsushima-incident>

注・司書から提供をうけた資料。対馬事件の概略をうるにより解説文(英文)。

(ロシア海軍  
関係者の写真)

フリー百科事典『Wikipedia』